肥後金工録　全

Ans - July 2nd

No 12 Higashi-chikaramachi
Nagoya Japan June 1st 1914.

Dear Sir

In another cover, I am sending you a sketch of Japanese sword guard in Higo, a famus branch of that art, which I hope you will accept with my Compliments.

yours very truly

Kiroku Adachi

序

肥後乃金工ハ我〻の遠祖三齋君の來し

丹後におはせし時平田彦三といふを用

ひられしにはしまれり彦三ハ近江の人に

て其乃頃乃名手なりしのみならす其の

技を君に傳へまいらせまた西垣勘

四郎といふものにも授けて勘四郎も

後は君に附從して肥後に來りその子
孫代々の業を傳へ我も勘四郎
鍔及ひ縁頭もよく林又七とよふ
あまたの祖は鐵砲鍛冶なりしかは
金工より加藤清正朝臣につかへしかのち
肥後にありしに寛永年中我か細川
家につかへる金工と同しく金工となりけれハ

同國春日村に住ける鍔
とつくりの他平田の一族にて志水甚
五郎といへる者の作を甚吾鍔とい
ひ又諏訪幾平の幾平鍔といふ
ありといつれも名高し近きころまて
この業を傳へしもの神吉甚左衛門と
いふものありしかともの物代を責むとい

ひろく林の門流ありき
ことに肥後金工の世にあらはれてより
きたりその鍔縁頭小柄笄等に於る象
眼及ひ透し彫の技術乃進みたるよりその
質の鍛錬よろしきを得て形色合ひ
の極めて高尚なるものとなり中にも色合
ひとて三齋君かつて發明せられし緑

そのころ維新前まへころに技術家の一子あり
佛の法として崇め奉れるもの也けれハ
世換り時移りしかハその精巧なる技術ハ
内外国人にもてはやされ肥後金工
の名天下にあまねかりしに至れる理りな
り

土佐の人長屋重名氏陸軍大佐たりし

て久しく肥後にありしに其の金工の名
てしそゝに愛しつゝ其の沖甚をつまびらかにし技術
乃妙奥をきはめ大に發明するところあり
系を分ち統を正して肥後金工録と
いふを編述し後これを我か宗家細川
侯爵家に寄贈せられしより世人に物を
り思ひつきてそのいはゆる工人たる立川

乃水の奈とくのへゝゑ生れしその畫一と
ひ世に心をとゞめしなるその精巧なる
技術の譽れは阿蘇の煙の遠長く
世に仰がるべし大佐の志をよろこび
折しもあり一言を序す
明治卅四年十月　子爵長岡護美識

昔我南海舊藩のとき少壯黨輩中特に某々等相好みて肥後刀を摹造せり予亦其一人たりき抑所謂肥後刀なるものは三齋細川公より始むることゝ喋々を要せずといへども其製の品位如何に在ては專ら屬具の適否に關すといふ是豈講ぜざる可けんや然に當時予輩外藩の士にありては或は幸に其一欝を試るも奈何せん全鼎を窺ふに由なく常に以遺憾となせり明治初年以來予西遊數々該地に入るといへども匆忙の際復金工の事に及ぶに遑あらず越て十六年の夏月又赴くや餘暇を以て其見聞を貪り且分に隨て收拾をも勉め爰に多歲の宿念を果さんとす因て該作の品等及作者の系譜等を錄取し以て備忘に供せり今茲齋らして東京に歸り試に同好に示す幸に其賛

成を博し竟に此編をなすに至る予嘗世間此類の書物を閲するに往々口傳あり云々又見所あり云々是等漠然たる語少なしとせず殆看者をして五里霧中に迷はしむ因て窃に疑ふこれ編者の秘訣即ち遁辭に過ぎざるべしと予は此編を草するに臨み先こゝに注念を加へ努めて實録を期したり然に記するに際し間々誠に筆に盡しがたきものにあふ終にかの顰に倣ふの止を得ざるに至る請ふ看者幸に予が前人の著述を疑ひし疑を生ずる莫らんことをこのころ聞或人此著を難じ曰今や刀劍已に廢棄殆玩弄物に過ぎず何ぞ復金工を論ずるを要せむや此編到底無益に歸すべしと又某氏あり曰斯の如き金工亦美術の一に居る其古今名技名作を彰はしこれを世に紹介

するは其意深切決して無益の事にあらずと二説相反す乃此の如し然るに世自から公論あらむ予は必ずこれを辨ぜず但予元遠地の生産にも拘はらず該地特有の名技に對し口づから評論する猶且妄なるを恐る況や之を筆記するをや又況や僅々數年間の淺見に過ぎずその所謂半鼎だも猶未嘗め盡すこと能ばざるに於けるをや杜撰の責を免かれざるべし特に同好君子の是正を竢つと云爾

明治十九歳勉東京の市谷の寓居にゐて誌す

肥後金工錄

土佐　鐵網海客著

○林家

第一數枝重政薩摩守と稱す
本國近江神崎に住す足利公に仕へ文龜年間知行三百石を領す
初鐔工たり鐵砲初て渡り爾來鐵砲師となる
享祿四年打死(何役たるや分明ならす)行年二十七歳
第二源左衛門重信
豐臣公に仕へ知行三百石を領す尾州中村に居り後播州に移る時に加
藤清正公の所望に依り轉仕す播州高取備中冠賤ケ嶽等の諸役に出づ
といふ
天正六年肥後國へ下る

此作有無分明ならす

寛永六年死年齢其他詳ならす

第三八助重直

肥後飽田郡横手村に住す後忠廣(加藤)改易に依り浪人となる其終を知らす

この作も分明ならす

第四又七(春日初代)重治後重吉實は清兵衛二男(清兵衛詳ならす或は源左衛門の初名か)

細川公に仕へ鐔工専門に復す廿人扶持を賜ふ初捧安坂大木氏の家に寄宿す(案するに加藤氏改易後浪々となり此際大木氏は加藤の老臣たる由緒を以て身を托し後大木か細川公に仕ふるに當り隨て出身せしものか)後春日村に住す代々此に居るを以て春日鐔の名あり

清正公相傳南蠻鐵明珍の名附源左衛門より受くと其家譜に見ゆれとも詳ならす

此作肥後金工第一等と稱す鐵及銅赤銅四分一等諸作あり就中鐵色は絶類にして其地合のしまりよく麗はしき事は譬へんにものなし又布目象眼は盡く精妙を極め又彫込象眼は雅致あり共に絶品なり但据物はいまた見す

鐔の在銘は林又七或は又七と多くは金もて入る又林又七重治作と長銘もまれにはあるも概して無銘物たり其緣頭類にもまゝ在銘もの見ゆれと大抵は後入の如し

鐔の式に至ては透、板、共各種あり但アヲリ形と環耳とは見へす象眼は二重唐草、枯木、桐、葛繫き、渦、等は最著名なりまゝ綸子、網目もあり又一種ホツレ象眼は(ホリ込)妙也(龍は春日代々なきか如し)就中二重唐草は極て細かき針金にて入る精工いはんかたなし二代以下及他家の夢たも見る能はさる所なり

象眼は大抵燒金を用ゆ別して艶あり枯木の如きはホリ込に作り鑽底

張りに切る故に金色最深くして奥ゆかしく見ゆ(二代以下は槪して金色劣る)

有名なる肥後三枚と唱へる九曜櫻紋透しの鍔あり嘗其二枚を觀るを得たり眞に非常の作にして透の精工なる先驚くべく象眼の綿密なる更驚くに餘あり三枚中二は地象眼二重唐草にして他一枚は綸子たり其圖下の附圖の部に出す

此作總て精工を貴ふ中にまゝ壯年の作とて稍粗の如きも見ゆ(重に透鍔)多は鑚透なれは輕々見れは或は初代勘四郞作かと誤るべしされと諦視すれは粗のことく見ゆる所ろ即其力の所にて迚も〳〵他作の及ふへきにあらす又壯年の作と一槪に極めかたし鑒定家注意を要すへきは專ら此等の作行に在る如し

緣頭鐺等の作行も他作とは特別にして其式は色々あれとも先第一しまりて强く頭には袴腰、丸形、緣には蟻腰、樋等は通例なり鐺の式は一定

なかるへし重に深き泥摺の類ならんかこれも甚稀なり又異體の頭は多くは銅及四分一にある如し或は結ひ、或は行合、或は鼻クリ形の類にて大かた玉縁を付す其上に鋲を打つもあり鋲頭長きも眞丸もあり鋲端裏迄貫きたるかたなり(他家にも鋲の式あれとも大抵玉縁際に打つ例にて玉縁上に打つはいまた見す且鋲首眞丸にして稍小きものとす)又縁の仕掛は沸し繼き蠟繼二法あれと多くは沸し繼のかたなり又縁金は惣して薄きかたにして形は長からす(勘四郎作の如くに)試に縁の小口より底のかたを(天上金に至る)のぞき見るに裏行あらはに見ゆるはあしゝ正眞の作はどこやら奥深く覺ゆるなり此獨又七に限らす肥後名作の縁はいつれも同し
縁金の繼き目肥後諸家皆沸し繼に造るといへとも獨春日には蠟繼あり故に僞作にも大かた蠟繼に造る但し前にもいふ如くとかく及ひかたき所はしまりに在り且繼目の力金の所にも見所あるへし

布目象眼は肥後諸工皆あり中に八代作は最名代なり然とも矢張此作を以第一となすそは又七象眼は踈密に拘はらす沈着して浮き出る如きはなし中には手置のあしきに依り脱けたるもあれと痕跡に就て能見れは他家と異る所自から判然たるへし

某氏の藏鐔に金布目を以敗扇と散櫻とを造るあり（又某にも同一の作を藏す一は丸形一は木瓜形にして小透及覆輪あるを異とす）此作行異例の如し極めて厚き象眼にして一寸見れは据物かと思ふ計なり又或は正阿彌の作と誤るへし名家時にこれあり眞に量り知りかたし然とも其實矢張捉は扇の骨と櫻及ホツレ象眼の處に於て顯る（丸形最佳作圖下に出す）

馬針は殊に乏しきもの也正眞の作とてはいまた見す聞く細川侯の藏に一本ありと（象眼二重唐草）他にも名たけ高きものあれと皆疑ふへし其或藏品の如きは熊本第一の如くはやせとも一見正阿彌の作にてい

つの時なるか未熟鑑定者か妄に取り極めたるに過きさるへし大抵皆此類と知るべし

又七の妻は法橋來國次の女なり(國次は當時の刀匠なり)一日國次又七のもとに到り其鐔の作を見て大に嘲り謂ふ汝か鐔いまたきたひ足らす余か鍛ひたる刀を以てすれは忽切るへしと又七年若なれはやつきとなり即答に能切るなれは切りて見よと國次切りけるに果して截れたり是に於て又七大に愧ち後鍛錬法を嶽父に受け益精妙に至るとそかゝる苦辛研究の上なれは地極めてしまり鐵色の美なる誠に他作の及ひかたき所とす(又七元來鐵砲師より出つ其地鐵のしまり已に尋常金工の類にあらさるへし況や刀匠の傳授を受けたるおや宜哉其二代以下他家皆及はす)餘は總論に譲る

慶長十八年生元祿十二年八月廿六日死行年八十七

二代目(春日二代目也以下之に準す)藤平　重光

五人扶持切米拾五石

此作概ね初代の掟に依るといへとも却て雅趣ありゆゑに精密の作ものは寧ろ乏し重に透鐔にて板及象眼ものは甚稀也紋透も種々あれと初代の品格に及ひかたし其笹蟹、武藏野、桐等の作の如きは往々初代に迫るものを見るこれ平生得意のものか枯木象眼も曾て一見せり銀以て入る(初代には銀は見す)枝幹とも針なく枝は稍長く且低れたるかた也或は彥三の枯木に近し此作行初代より下るは無論なり然り亦自から賞すへし鍔の作在銘多し通例は表に𣳾と切り裏に重光と楷書にて切るまゝ𣳾とまて表に切る金銘なるはいまた見す

二代は自ら二代の價ありて亦上手なり吟味の足らさる昔にては初代の作として通りしもの頗多しとそ

緣頭、鐺等の作さたかならす從來春日作にて初代迄上しかたく又三代には過きるとなす作容易に此作に極める弊あれと其二代は自ら二代

の地鐵等ありて決して混評すへからす

寛文七年生延享元年五月十六日死行年七十八歳

三代目藤八重吉後房吉又重方

五八扶持(以下代々祿同し)

此作總て家法を株守す亦一代の上手の名を博したるのみならす一時は二代より勝る如き好評を得るに至るといふ(其實二代より劣る其象眼ものを多く造り時好に適するゆゑに此評ある所以か)

此作密なるもの多しこれ其初代の衣鉢といふ所なるへきか霞櫻、薇手、透等の如きは大かた葛菱を入る手際甚美にして初代の風あれとも其霞の透方譬は初代は細毛髮も啻ならさるも此作は棕梠の毛の如しこれも其及はさるの一證ならむ

象眼中カツラ菱は出來よきは初代に迫るといへと能く見れは殆死生の差あるへし初代には變化あり此は大抵同一物を聯り盡す酷評すれ

は紺屋の形の如し張金も肉太きに過く鐔の式多くは町人好みに入る
へき様のものあり勝とす惜むへし(縁頭の作も亦同し)

享保八年生寛政三年八月朔日死行年六十九

四代目平藏 重次

延享元年生天明四年七月死年四十一

五代目又平 重久重之又源保之と銘するは同人との說あり

明和七年生文政六年十一月死年五十四

六代目又八 前名武兵衛

天保十一年八月死

七代目藤七

明治七年六月死

八代目即當代百雄

以上は春日の歴代たり然れとも其の著名なるものは三代目迄とす以

下代を追ひ分ち評するに足らすすへて略す

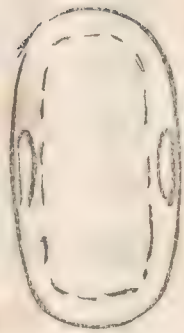
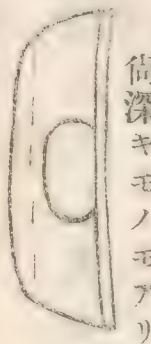
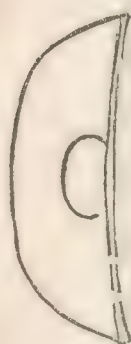
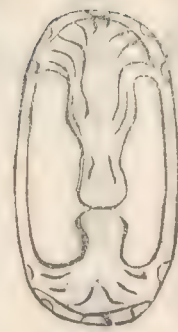
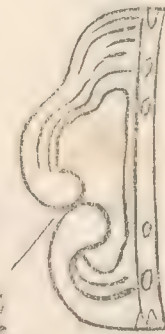
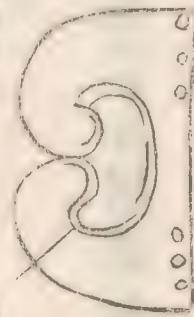
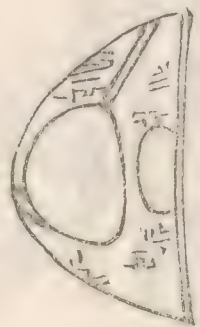
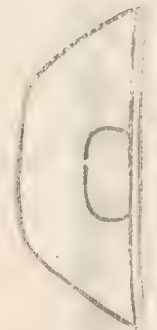
三代以上の作行に就き猶細評を加ふへし初代は鐵色黒き中に紫光を帶て深し二代目はこれに亞くも稍上は色の氣味を免かれす三代目に至て漸赤味を呈す如し

鍔の切羽臺も代を追ふてしまり方減す其櫃穴亦然り

初代の鐔の肉置にまゝ厚きに過る如きあれとたとへは他作の如き水腫に似たるはなし所謂肉は骨を包むなれは骨の組織如何に關係すへきは勿論たり只初代に限り必す骨肉よろしきを得るなり二代の初代に及はすといふも重にこゝにあるへし三代の二代におよはさる亦然り概して二代目は骨稍肉に勝ち三代目は骨小なるに拘はらす常に肉過る如し其透物におゐて最此病を認む

三代目の象眼に就き猶又補ひいふへし大かた姿よく造りたるもたゝ足さる所は精神に在り今試に畫を借り評せんか彼古法眼の彩色に倣

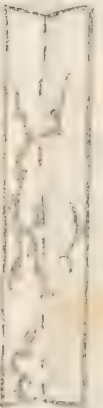
ひたる末狩野の筆に於ける如し徒に其家法墨守故に先形似を勉め人物花鳥一見皆能摹したるを認むも奈何せん板病を免かれかたし是他なし精神至らさるの責ならんか春日三代目の作は猶末狩野の畫と同斷といふへし更に酷評するときは婦女子の好に入ものといはんのみ四代以下は取らす然共名家の末況や連綿大諸侯の工人たれは時々の作は勿論其他諸方へ贈進物の作類多くあるとそ

縁頭及鐺等の諸式概ね左圖の如し但専ら初代の作を擧く

袴腰、丸、舟底、鼻操等ハ専ラ鐵ニアリ浪鶴又袴腰ノ雷門ヘリノ如キハ多ク四分一銅等ニシテ銀赤銅共ニ見ス鍔ハ専ラ白眼モノニ打ツ例ナリ

圖ニ云西垣ノ鶴頭ハ鐵ニアリ或ハ金以テ眼ヲ入ルアリ作行自ラ別ナリ

通例縁　肉置平ノ方

マヽ天地縁ノモノアリ
肉置丸ク且深シ

蟻腰形　肉置丸ク強シ

枯木金彫込象眼或ハ又
桐等モアリ

樋形　此式世珍重ス

天上金　銅ニシテ縁金ト
平ナリ

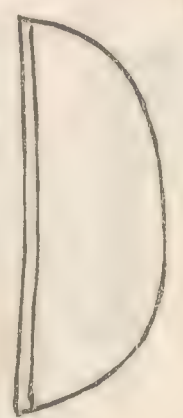
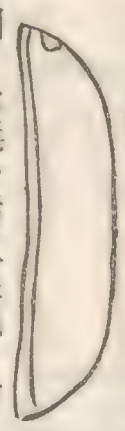
天上共金ニ作ルハナシ

泥摺鐺　深ク丸キ方

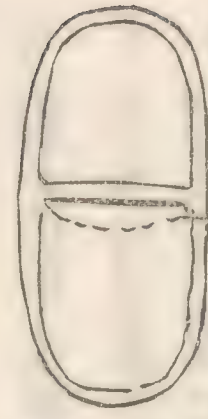
同

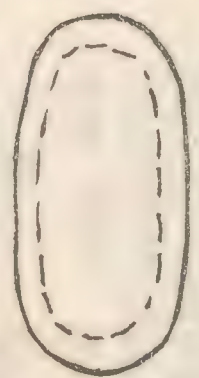
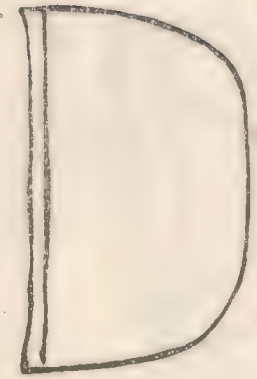
同舟底式　淺キ方

緣際肉置最強シ

同　鎺ナキモアリ又厚朱共鎺打ツモアリ但共金ナリ

因ニ云鎺ハ諸工銀以テ打例アレト・ハ絕テナシ

泥摺裏行

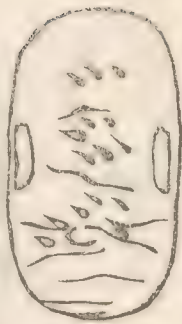
力金底ニ着モ着セサルモ共ニアリ又マヽ二行ノ式モ見ル

因ニ云泥摺ノ一種巾狭ク長ク痩タル形モアリ多クハ舟底形ニシテ力金ハ棒ナリコレヲ帆柱形ト稱ス最得カタシ其何人ノ作ヤ知リカタシ或云春日初代ヨリ古シト御家刀拵ニ於テ珍重セラルモノトス

袋式　　同

袋鐺ハ初代二代共正眞ハ見ス此ハ三代目ノ作行ヲ示ス世ニ三代目ノ作ト稱シ櫻或ハカッラッナキ等ノ象眼鐺マヽ見ルト雖大抵ハ疑フベシ其綸子又七實雷門ノ如キハ最信シカタシ從前ハ諏訪幾平神吉祖父又ハ谷清兵衞ノ作等モ春日象眼ニ擬シタルモノハ動モスレハ三代目ノ作トナセシトソ

末春日も概ね以上の式なるへし又諸家にも同式を以て造るもの甚多し猶色々あるへきもこゝには有名にして正眞のものを示すのみ神吉

樂壽舊愛にかゝる有名の不知火頭あり袴腰式にして形最強く眞に二なき作とす誠に賞すへし又余か愛藏にも絶品の鐺あり二品特別に左に圖す

火
金ニテ入ホリ込ナリ
白キハヌケ跡ナリ

泥浪ホリ上最淺シ其溝ノ模糊タル所即夜景ヲ寫シ尤妙トス

鍔の切羽臺并に榲等の事は已に荒方述へしか單に形のみを唱ふときは代々左迄の差なき如しといへども其實大にあり三代目の如きは臺の四隅稍張るくせも見ゆ大略左に示す

初代

同

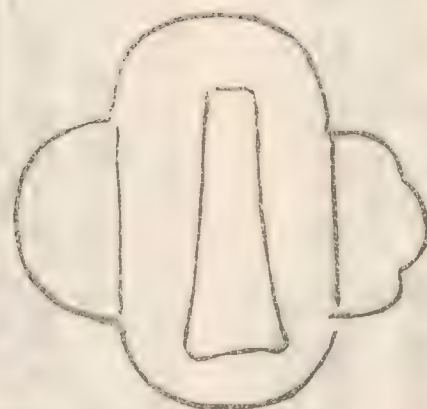
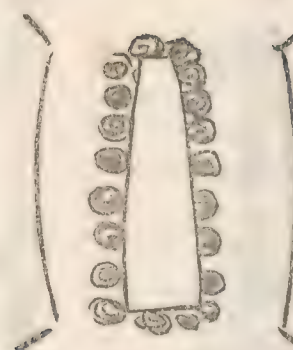
同

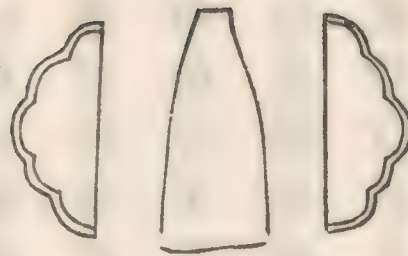
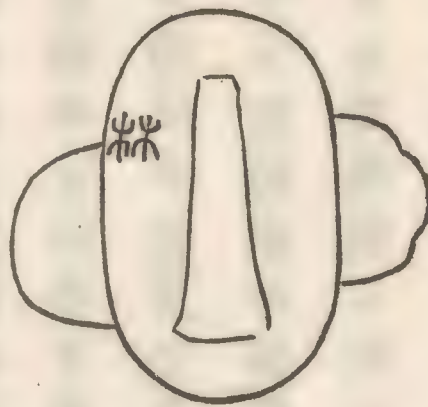
渦タカネハ重テ稀ナリ

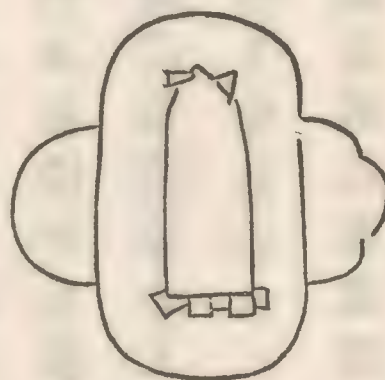
同

以下片櫃ヲ作リ集メ圖スルモノ

同

初代作ニハ毛ホリ無此殘ルモノアリマヽ二代ニモ又両垣初代ニモ見ル

此式初代以下皆あり

毛ホリ肉代々差あり
三代目は肉稍大なり

二代目

ウラ
重光

三代目

中心穴際ノ刻印代々種々アリ一定セス但三代目ハ多ク圖ノ如キ印アリ然ニ神吉祖父ノ作ニモ往々似タル印ヲ見ル

○平田家

元祖松本因幡守

江州佐々木氏の族たり佐々木沒落の後浪人となる京都にゐて細川三齋公に仕へて丹後に隨行し知行百石を受く慶長年間石田三成兵をやり田邊の城を攻む因幡守能く力む後細川公豊前に入り爾來の忠節

を賞し知行三百五拾石を賜ふ

妻は小侍従と稱す明智日向守より秀林院(三齋公室)へ付人の女房といふ嫡子彦三幼年なるを以て甥松本助之允相續をなし祿二百石を賜ふ其終を知らす

初代平田彦三平田と改姓の事由詳ならす

別祿百石を給ふ(案するに松本氏家祿の別なる如く又同時に革姓別戸に立ちたらんか又一説に彦三豊前小倉におゐて武家奉公辭退し細川公の特命に依り更に金銀鑑定の事を司るともいふとにかく彦三は松本氏の子ならん然ども別祿云々見へ且因幡守助之允共に金工の事見へす依て彦三を以て金工平田家の初代と稱すへきなり

此作行春日とは別趣なり地鐵强くかつ澤あり鍔の式は木瓜形、丸形、長丸形等種々あり其櫃の式概ね大形なり又地燒手クサラシを用ゆもの多し時雨、丸線(ロクロにはあらず)等掟なり鍔の作地金烏銅、眞鍮、銅の類

最多く鐵地は割合には少なし總て古意ある作行にして絶へて俗氣なし其薄出來には古正阿彌の作の如き又或は三齋公作の如きものもあり概して品格高く見ゆ尋常工人の作と異る所以なり

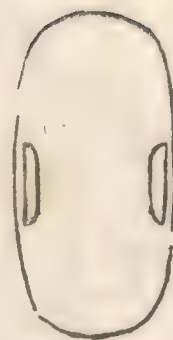
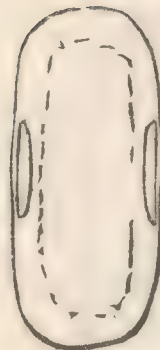
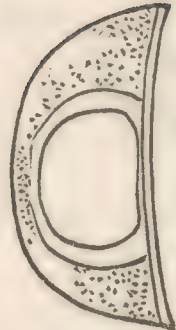
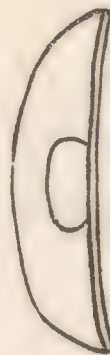
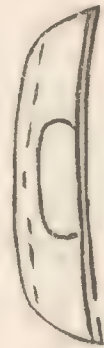
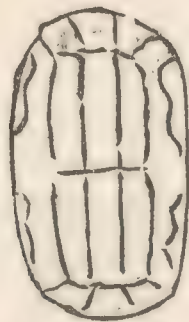
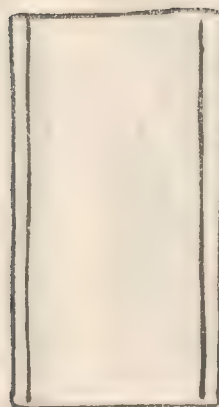
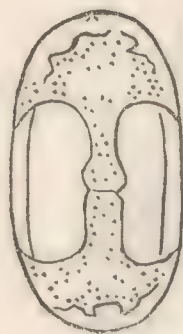
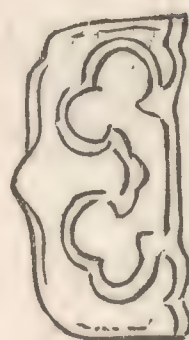
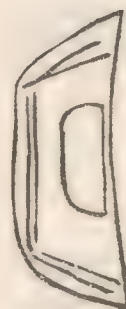
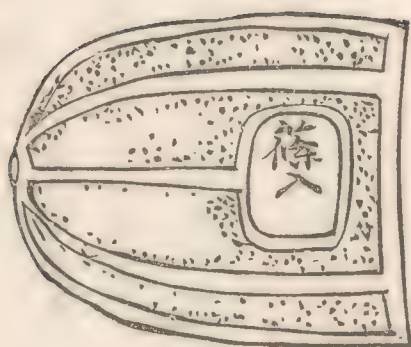
地透物中九曜櫻の如きは通例なり普通透鍔は稀とす象眼ものは金銀布目ケシ込ミ眞鍮地赤銅ホリ込象眼其唐草は勝れて見事なり此法は肥後諸工絶て見す蓋甚難きものなりとそ又象眼中物形、分明ならさるものあり是を塵紙象眼といふ甚雅趣あり蓋春日初代得意のホツレと異法同趣なる如し

枯木は一種の法にて枝幹共に針を設けすこれ却て雅なり据物はいまた見す初よりなきや又彫は大小精踈種々あり多くは草々と片切彫なり重にタカネ大なる方又一種殊に大肉片切も見ゆ

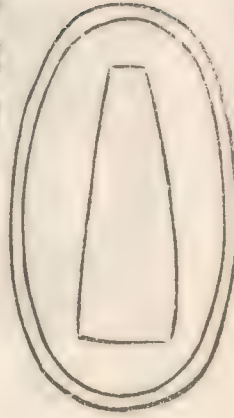
此作地金の何に拘はらず覆輪鍔多し至て見事にて就中小田原覆輪の如きは獨歩と稱す又細き打返し耳も能作る(神吉樂壽常にいふ他作の

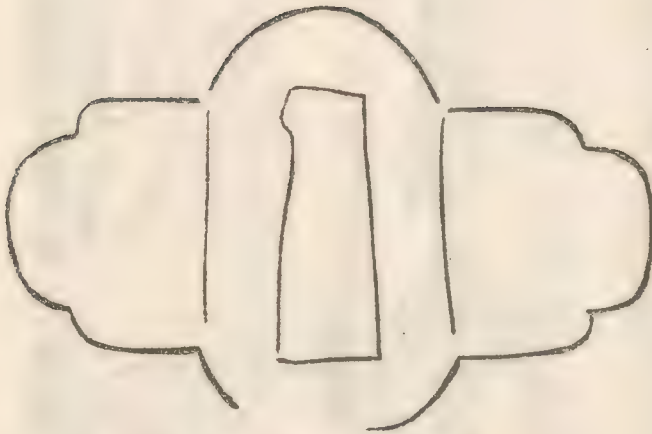
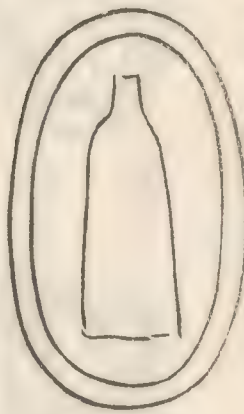
覆輪は之を脱して撿するに耳甚踈略かスリ直しものにあらさるは殆なし獨彥三の作は元覆輪を取る前におゐて十分仕上け而して後掛けたる事にて他作と異る所以なり故に往々覆輪脱しのまゝ用ゆるに足るなりと

緣頭の作は彫及象眼共にあり重に毛ホりとす(地石目多し)櫻花、唐草、時雨、渦等又立浪のホリ上皆掟ものなり(立浪は世久しく勘四郎を以第一となす即勘四郎浪の稱あり其浪頭に一種の毛ほりありてこれを特有の如くいへと何そ知らん彥三精作には已にこれあり勘四郎は恐らくは彥三法に習ふものと神吉の說ありき)又彥三浪は腰稍高く勘四郎は低し彥は高き故に下張り勘は低きゆゑに橫張るかたなり

此作在銘は絕てなくして獨其末に傳へる有名の三光の鐔にあるのみ其圖下の圖部に出す

緣頭及其他の式概ね左圖の如し但緣頭は過半白銀ものとす

丸形　深キ方
同　玉縁ホリ上細キ方
袴腰形　小キ方
毛ホリ
同
ナツメ形　長キ方
同
行合浪形　銅地銀吹掛
但シ吹掛法ハ他ニ未タ見ス
同
鋲銀ナリ小キ方
鼻クリ形　四分一
牛太刀頭　烏銅
同　玉縁銀ニテ入
異体深頭
銅筋赤銅ニテ入
樋形　樋廣ク深キ方
眞鍮赤銅象眼但葉銀
牛太刀縁　最深キ方

戸樋形　上下縁ノモノモアリ

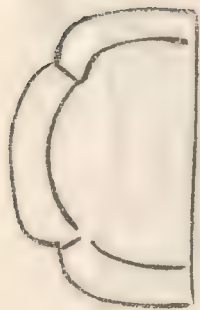
例

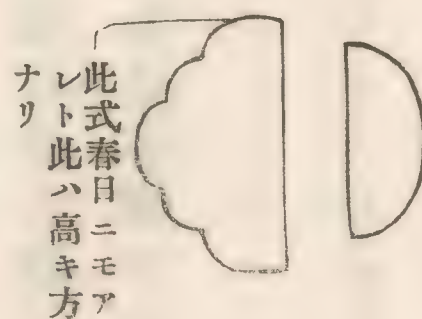
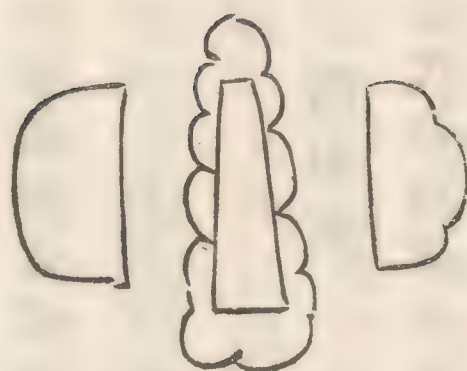
洲濱櫃　此式西垣ニモアリ但シ肩及脚ニ見處アルヘシ

蟻腰形　銅渦時雨共ニ彫最深キモアリ

縁金厚キ式

此式ハ専ラ大透モノ、内ニ付ス譬ヘハ扇地紙ノ如キモノゝ内部ニ設クナリ

袋鐺　鐵

肉置キ角丸ノ方

玉縁金布目象眼

以下左右同式ノモノ
畧シテ片櫃ヲ示ス

此式春日ニモアレト此ハ高キ方ナリ

如此刻印ヲ打ツモアリ従前ハ此ヲ彦三ニ限ル如ク云ヘトモソハ妄ナリ春日及西垣ニモマヽ有之又他國作ニハ少ナシトセス余カ藏品中此印アル彦三ハ十中三四ニ過キス又此印ヲ付シタルモノニ多ク僞物ヲ認ムルコトアリ吟味セサルヘカラス

此式專ラ大鍔ニ於テ見ル
但シ片櫃モノ

以上諸式專ら初代を摹す二代以下亦此に出てす略す

太鼓縁は肥後諸家皆あれと(春日には稀)此作には絶て見す馬針小柄笄類亦見へす鍔の圖下に示すへし

寛永三年十一月九日死年齢詳ならす。

二代目少三郎
合力米貳拾石
此作總て初代に據るといへとも大に劣る依て略す
三代目彦三實ハ芳賀某ノ三男
以下連綿當代彦三に至り八代目となる此間作の記すへきものなし代
によりては總て無作とも云ふ
初代は流石に武門程ありて作物總て氣高く見ゆ勘四郎及甚五の如き
名手皆此門より出つ其將に將たるの技倆知るに足るへし肥後諸家春
日初西垣八代共に初代以下三代目迄上手と稱す獨平田は初代一人に
止り二代以下名絶ゆ（初代には香はしき武談あれと此に要なきに付略
す）

○西垣家

初代勘四郎吉弘

丹波國内外宮の神官某の子なり(鏨工譜略には土州の產とあれと誤りなり)平田彦三の門人となり三齋公に仕へ肥後下國因て貳拾人扶持を給ひ八代に住す

此作鍔縁頭等諸作殆あらさるなし最縁頭に工にして世勘四郎縁の稱あり(今存在の作縁多く割合に頭少しゆゑに縁の稱あるにや其頭は通例長ナツメ形にて時好に合はす故に捨たるもあるべし縁の式も他家よりは長目なり後世は直して用ゆるなり)

地鐵は概ね其師彦三に近きといへとも稍サツクリとする心ありまゝこれに反し鏡面の如きも見ゆ

据物象眼彫透の諸法いつれも見事なり殊に勝れたるは縁の作なり又七といへとも一歩を譲るものありこれ等は重に精密の作に在る如し鐔の形は大かた丸き下張りに作る眞丸、及アヲリ形、木瓜等は稀其ヱフゴ、巽風巴、扇透等は掟ものとす又ヱフゴ、巽風巴、ともに多くは唐草を入

る（象眼金色稍下の方銀は稀なり）其法は平田にもあらす春日とは又大に異る第一張金は稍肉フクレ勝手にて且浮き出てたること〻ろあり又葉先幷に蔓におゐて見所あるべし
透鍔亦工にて式は種々あり桐、松、梅、菊等多く見るま〻又七の壯年作に髣髴たるもあり然に細に見れは第一其櫃の式又耳の法異れり（耳櫃肉置多くは尖り勝手なり）
眞鍮鐔には名作見ゆ（銅は未見す）ホリ上、ケシ込、据物、地透物、あらさるなし其田毎の月の作最有名なり全圖下に出す
緣の圖には東家、蘆雁、蓬舟、千網、蛇籠、初月、梅、櫻、（吹寄、網川等）松、糸卷、蛛絲、又中心、（古名刀の銘を摹したるもの西垣名代の一なり）等枚擧に遑あらす蟹、人物、（多くは据物）龍、投桐の如きは重に精作におゐて見る枯木はま〻緣にあるも緣頭にはいまた見す又枯木は布目にて入り枝幹とも針なし作中拙なる如し

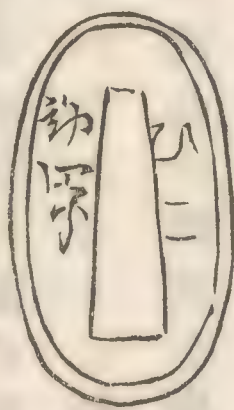
家藏中投桐兩三品あり中に眞に絶品と稱すべき精作あり特に圖を掲く左の如し

厚燒金布目殆据物ノ如シ　○ハ脫ヲ示ス

西垣普通精作ト稱スルモノニモ象眼上ノ毛ホリ一重ニテ（葉ノミ二重毛ホリハアリ）葉ノ横シベ大抵二段ニ止リ三段ナルハ未タ見ス其花心ニ至テ二重ニ入ル如キハ最稀ナルヘシ此作比類ナキ精工トナス所以ナリ

又家藏中左の在銘緣あり亦絶てなくして獨これあるものとなす

鐵生ノマヽ

但天上ハ銅ナリ

此圖ハ松ニ帆舟ナリ

松眞鍮帆銅共ニ据物

此作に彫上ものにも亦名代の作あり一種の淚にて俗に草の淚といふ

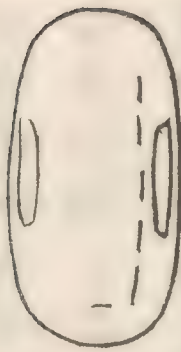
他家に絶てなし又此作にも甚稀なり左の如し

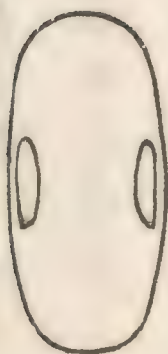
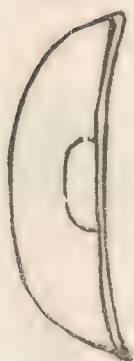
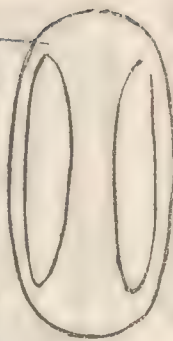
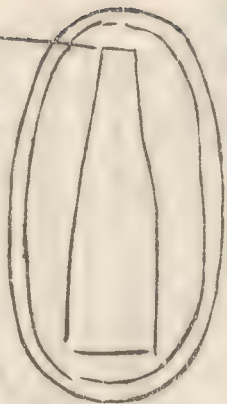
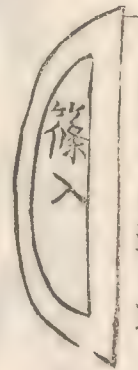
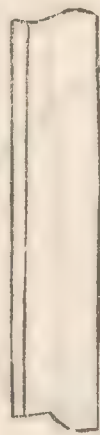
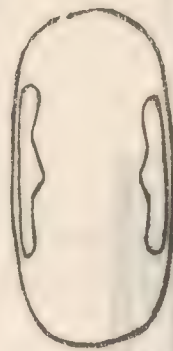
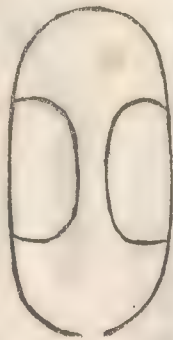
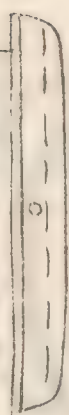
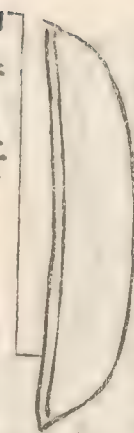
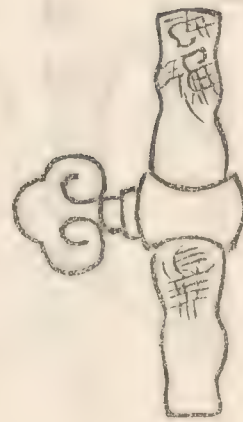
肉置最高ク且丸キ方　地四分一

此彫アル縁ハ多クハトヒ式タリ

此外最有名なる引舟の圖の縁ありといふ其圖柄は人物舟等金銀赤銅四分一種々のいろゑなりと極念入の作なるべし

縁頭鐺其他小道具の諸式を擧くへし頭にはナツメ形縁は太鼓形は通例とす戸樋形及壺形等は專ら赤銅四分一を以造り象眼は大抵ケシ込にして美なり若壺形に彫上又は据物又は鐵を以造りたる作あれは必す精作ならん(銅及眞鍮地にもケシ込ホリ上共にあれとも其縁の式は太鼓形の外いまた見す又其頭の式中袴腰縁の式中蟻腰は西垣代々見す諸式凡左の如し

通例ナツメ形

同　稍角肉ノ方

同

同

深丸形
糸穴洲濱式モアリ
同
此式一定ノ名稱ナシ
同
庵ナシ内淺キ方
篠入
此式ハ四分一又ハ眞鍮ノ外見ス又ホリハ浪ノホリ上ニ限ル如シ
通例太鼓形緣
玉緣ナシ
通例緣
ワカシツキ但白銀モノニハ蠟吹ナルコハ勿論ナリ且緣金ト天上金ト平ニナル
天上金ヲ緣ニテ受ク但蠟着ニアラスシメ付ケタルナリ
猫脊形
鼻操形
壺口形
玉緣ホリ上也金ハミス
泥摺鐺
最淺キ式
同
肉置丸ク稍尖ル方
戸樋形
肉置自然ニ成ルモアリ
同
布目象眼ヲ以櫻花或ハ鶴等ヲ作ルモアリ
淺キ式ニハ庵少ナシ

泥摺式　消深キ式更ニ深キモアリ
栗形
袋鐺式
ホリ上ケモノ、中裏ヨリ打出シノ如ク見ユルモアリ又稀ニハ据物モアルトソ
鍬形式
薄ク尖ル方
白銀モノニマヽ見ル但多クハ浪ノホリアリ
半鍬形
縁象眼銀ホリ込ミ二代目ノ作ナラン
象眼金張金ヲ以入ル
縁銀布目
三星金具　鐵六所揃物
雲彫上金銀布目
玉縁金布目

初代作　赤銅ミカキ地　舟金据物カヒ銅ホリ込蘆金ケシ込岸ホリ上

ウラ無地但ミカキ

（此對作馬針柄アリ今散失ミヘスト云）

二代目作　鐵　蒲鉾形薄作ノ方　蟹四分一据物水毛ホリ草金ホリ込

ウラ無地

初代　鐵　角肉厚作ノ方　雲毛ホリ銀布目

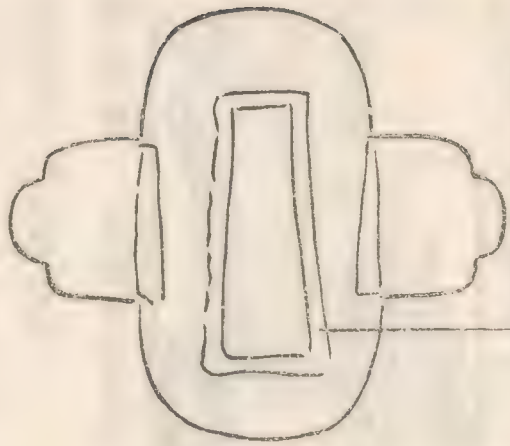
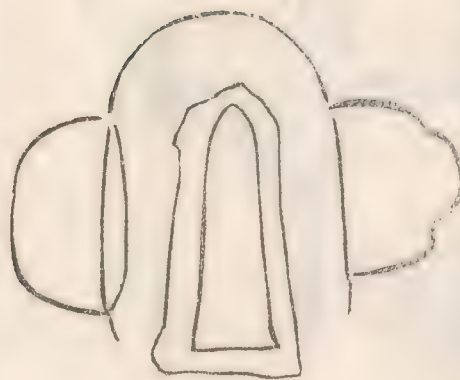
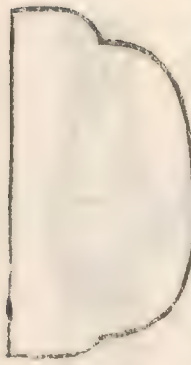
ウラ無地

二代　鐵　肉置蒲鉾薄キ方　月眞鍮据物

キサミ

ウラ無地

二代目作には後藤傳三ツ所揃ものもありと現に其家筋に程乘形巴三所もの雛形存すといふ

鍔の櫃並に切羽台の式通例左圖の如し

同

扇透ノ台二代以下ニモ此式アリ

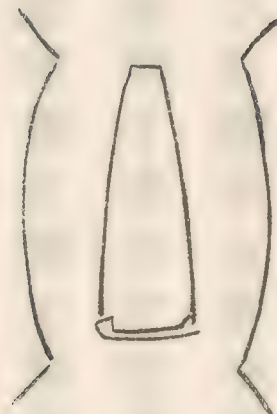
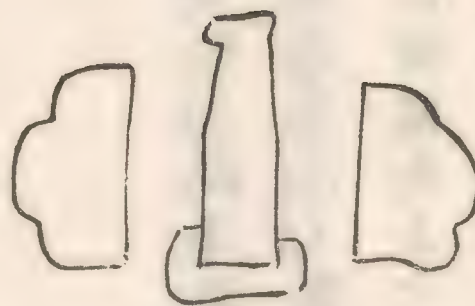
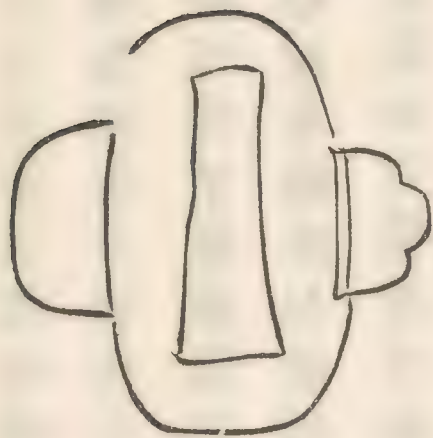
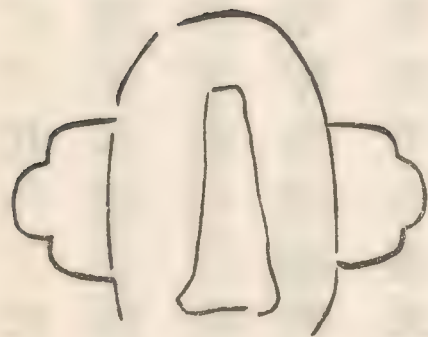
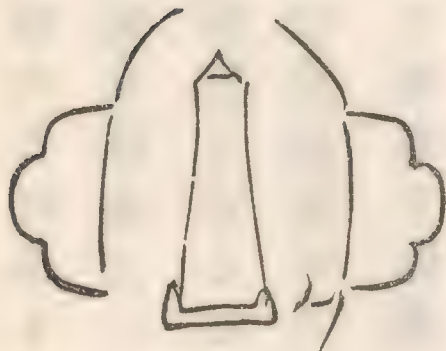
同

同

二代目

巴ノ櫃但シ異體尚一層異ルモアリ

同

西垣永久
七十歳作之

同

勘平

三代目

概ね斯の如しといへとも二代の初代に三代の二代に似たるはあり二代以下は概して美なるかたなれど趣乏し末は先代に依るのみ
在銘は初代には絶て見す西垣勘四郎作又肥州住勘四郎作と切るは皆二代なるべし勘平は在銘多し西垣勘平作又は勘平作と切る晩年には年齢を切りたるも見ゆ三代目は在銘まれなり某氏藏に前名を即西垣仁藏作と切たるものあり珍らし

慶長十八年生元祿六年死行年八十一

二代目勘四郎吉當又永久前名茂作

父の職を繼ぎ諸作多し後に後藤顯乘の門に入り傳書を得る鍔及緣頭等總上手にて二代たるに愧ちす作行を概評すれは美なる方にて初代より密なり其唐草象眼殊に勝れて見事なり(春日初代に髣髴たる二重唐草あるは此作とす)透物据物象眼もの種々あれと初代の雅味なし布目ものは三代とは分けかたくあれと初代とは判然たり其吹寄櫻の如

き花稍大にて心の毛彫に見所あり
寛永十六年生享祿二年死行年七十九歳
二男勘平 別居
此作行概して堅く見え品格隨て下る其透鍔の如きも肉置圭角ありて毛ホりものもとかく荒々しく覺ふ、又兒の如き妙なし但し枯木象眼はよく初代に似たり
諸作二代に次くへし但緣頭等の作は分ちかたし
生死年月詳ならす
三代目勘四郞 吉致前名仁藏
此作初代及二代の如く多く見ることなし其作名は二代に繼くしかし次第下りなり一般の作行は美なるかたなり
八代三代目甚吾は此門に入るといふ當時に於て重せらる亦知るへし
延寶八年生享保十三年死行年四十九

四代目勘四郎 吉敬實は野田某二男

此作いまた見すといへとも更に下るへし後故あり浪人となるといふ

享保八年生安永九年死年五十八歳

五代目勘左衛門 正久

江戸金工熊谷義久の門に入る(熊谷作に肥後式多きはこの故なり)

後次細工人となり三人扶持給ふ

明和七年生文政二年死行年五十

六代目四郎作 良久 後義久

職祿前に同し

江戸熊谷の門に入る

寛政三年生嘉永三年死六十歳

七代目勘左衛門 義正實は池田某二男

職祿前に同し

文政三年生明治十二年死年五十九

八代目即當代四郎作實は六代目長男

初代より連綿八代の間に於て代々作あらさるなし盛なりと謂ふへし然に二代目已に後藤傳を兼ね又五代六代相繼て江戸作者の門に遊ふこゝにおゐて家傳三變するものゝ如し其勘平の作たとへ品格至らさるも却て其自家正脈を維持するものと云ふも可ならんか

○志水家

初代仁兵衛一幸實は平田彥三甥

細川三齋公入國の際平田彥三と同しく隨行八代に住す彥三亡後實子少三郎は藩命に依り熊本に移り聟養子三郎兵衛なるもの判屋職となり仁兵衛白銀細工の養子相續し五人扶持給ふ

明智日向守家老志水丹左衛門に由緒あるを以て志水と改む

生年月詳ならす延寶三年五月死

二代目甚五郎永久(久は次の誤りならんか或は後久を次に改名し其記入脱落せしにや)
十五歳の時重扇の鐔を作り藩公に献す(三代目も例に依る)
家督の節三人扶持給ふ
元和六年生寶永七年正月死行年九十一歳
三代目甚五郎永義
貳人扶持給ふ
三代目西垣勘四郎の門に入る
以上の記は四代目甚五より其筋へ差出したる先祖付の寫に依る
元祿四年生安永六年死年八十七歳
四代目甚五實名詳ならす
扶持前に同し
延寶三年生文政六年死年七十八歳
五代目茂永以下俗稱詳ならす代々甚五と稱せしや

六代目永典
七代目永泰
八代目卽當代永利
以上志水の歴代たり然に肥後金工中甚五に至て時代其他に疑の容るへきもの頗多し第一系圖書粗略にして殆考へかたきもの少なしとせす今左に試みいふへし
初代は前の如く仁兵衛なり甚五の稱見へす又元來平田彥三甥にて其亡後細工養子の相續をなすとあれとも此事平田の系圖かきに見へすのみならす少三郎は彥三嫡子にて其相續人たる事は該系圖に明らかなり(少三郎作もあり)されは仁兵衛よしや一旦養子名義あるも出て志水を名乘(分家にもせよ)たる譯にて平田相續人といひかたきに似たり又八代初代は仁兵衛と稱す然に其實名の一幸と共に曾て在銘を見さるのみならす聞しもなし二代三代は共に甚五郎と稱すこれも世に有

名なる在銘ものはいつれも甚五にて郎はなしそは郎を略せしものにや疑ふへし

初代已に甚五にあらす仁兵衞なるときは初代甚五と稱すへからす然とも現に八代甚五と切りたる作に永次在銘のものに比して作行時代ともに上るへきものある如し且久しく傳へいふ永次は二代目なりと(先祖付中永久と名乘甚五郎の代を指す)然は仁兵衞亦或は初甚五郎と稱し其記入漏にや

三代目は三代目甚吾と銘す(八代にて代を切るは此外見す)又甚五の五を必す吾に作り郎はなし(一說に三代は其正統の子にあらす當時の名工を以て八代松井氏(細川侯一族の撰拔に依り三代目の銘を許可せしといふ)

甚五郎の郎を略せしは前說に假定するも三代は二代と異り吾の字に切り稱呼こそ同しきも全く異字なり古きは字體に頓着せすとの說も

あれと工人の銘振は彼輩に取り大切の事たり其常に異字を用ゆるは受けかたし作者若し文盲なるときは猶更守るへき筈ならん愈初代の名は仁兵衛なるときは從前八代仁兵衛とか志水一幸とか又は八代初代とか呼ふへき筈なりそれを久しく初代甚五と呼ひ來りしはとにかく誤りに歸すとせは今迄初代甚五と呼ふ作を繰り上け仁兵衛作と改ためて呼ひ而して從前同作となす作(實際在銘にて二代より上る如き作)を一代繰り下けさるを得さる結果とならん

甚五代々かくの如く疑ふへきもの多しといへとも今不完全なから鑑定上便利をも計り仁兵衛を單に八代初代と呼ひ寶永に死せし甚五郎を二代目と安永甚五郎を三代目との如く文政以下順序に說くへし初代作行總て古雅なり鍔の式は多くはアヲリ形、木瓜等にて環耳スキ下ケに作るものもあり概ね厚造のかたなり且肌物勝ちなれは一見甚美とはいひかたきも却趣あり

据物布目象眼共に著名にして其天龍、鯉等は据物ホリ共にあり人物、蟹其外動物類は專ら据物に作る例なり牛は彫上にて名代たり雁、糸卷、菊は重に眞鍮張金なり布目は金銀いつれもあり就中布目銀すりはき象眼は妙とす

又地鐵に燒手クサラシと唱ふ法あり最得意の如し案するに其師彦三傳來ならん但彦三に比して深く入るかた故に一層强く見ゆ時雨の彫亦著名なり亦平田法より變化せしものか疎なる所尤妙縁頭にも据物象眼共にあり龍、雲、蟹の類又稀には桐紋等もあり龍は凡三種あり鍔には諸種あれと縁頭には布目にて入り痩長きかたなりタカネハ毛彫とす蟹、桐等西垣作行と別にて一見或は拙の如き所即雅致の所か

又眞鍮張金を以唐草菊等も作る其金ホリ込は稀作たり

二代目鍔の作は工なり殊に勝れたるは古意あり初代に迫るへしといへとも概してタカネ槌目共初代より稍小き方にてかつ美なり此所實

は初代に遠く及はす(鍔式多く薄作なり)然共白銀ものには驚くへき精工あり或家の藏赤銅鍔金縄目覆輪取に作り全面精細なる毛彫を以唐草を造る非常の作たり一見或は埋忠作かと疑ふ計なり又銅四分一等にも精密なる彫込象眼なきにあらす(過半唐草)据物中龍、蟹等は大に初代に近きもあれと牛はタカネ稍過る如し卽工に過きると評すへきかしかし八代甚五の作と稱すは大かた此作に係る如く初代は勿論三代目の作も此作ほと多く見へすその緣頭及小道具の作は殊にしかり

三代目の作は地鐵初代二代よりはうるはしくやき手くさらしの類は稀ならん中にミカキ地にして春日の如き美觀もあり

鍔の式略二代に依る初代よりは大に薄し二代よりは稍厚きかたなり然共其牛、菊、透物等の作は所謂家の掟ものにて代々左迄差なかるへしといへと其差實は重に此等の作に見る

三代目の据物はいまた見す蓋稀なるへし布目はもとより見るも先代より遙に下り弱く見ゆ西垣の門に入るとあれは八代名物の布目も此代にて下落せし如し

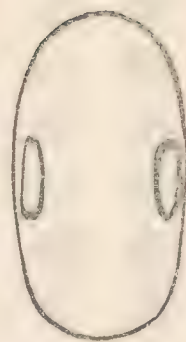
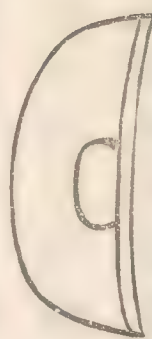
又此作には常に出來不出來ある如し然に僞物多きを以見れはとにかく一代の名人とはやされしは疑なし(僞作は瓢巴、スキ下菊の類なり)四代目も次て上手との聞へはあれといかゝにや慥成作とてはいまた見す其五代以下には作といふ程のものなきとそ

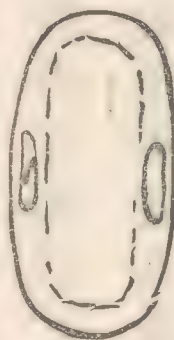
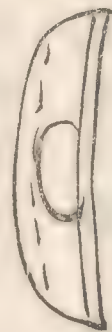
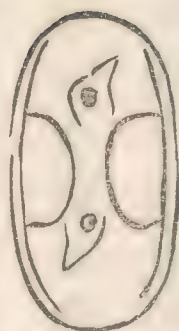
更に補ひいふへし八代鐔にも透ありしかし最少なし(鏨工譜略なとには透多く梅木桐其外にもありと見ゆれと甚しき誤りならん若あるも八橋或はタスキ透の類に過きさるへし又譜略に甚五は何頃なるや當八代になるとあり八代とは地名のやつしろなりそれを家の代とこゝろへかく記載したるもをかし)

眞鍮張金象眼布目象眼共特に八代の名代ものたりゆゑに僞物にも

多くはこれを寫す又張金は他家には金銀共にあれと八代には銀も稀況や金はなし獨家藏梅花鍔に見るのみ矢張眞鍮の法の如く入る眞に絕類なりと神吉樂壽も常に賞せり圖下に出す
緣頭は初代以下甚獲かたし其式は頭は重に大丸、袴腰、緣等は太皷たり丸形は西垣に比すれは肉强くかつ大にして深きかたなり袴腰は春日式より稍角肉にして高く武張る太皷は却て他家より槪して深くあるは常なれと却又厚からす(一種天上金を受く所極めて厚作のもの見ゆ)又白銀ものもあり其精密なる作には金小緣ある作も見ゆ多くは二代目以下の作なるへし
切羽臺弁櫃(初代には無櫃もの見ゆ)槪ね代々同し但代下るに隨ひ肉置におゐて著しく劣る
小柄笄馬針の如きは絕へて見ず鐺も至て稀なり家藏中長鐺及笄類似の一具あり共に二代作なるべし他具と共に下に圖を挿む

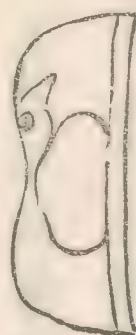
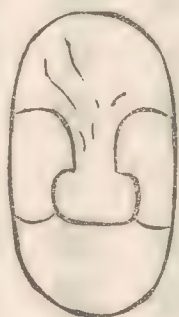
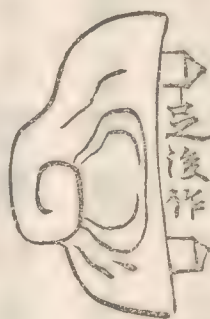
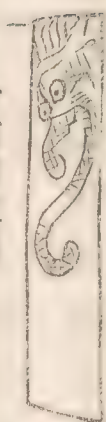
傳へ聞細川家舊制中小性は金瘡醫を兼ぬとぞ果して然は其笄に類似の一具は即膏藥へラに造りしものにや猶考ふべし

丸形　深キ方

同　稍淺キモアリ　且淺キハ稍尖ルコヽロ

袴腰形　角肉ノ方

同　丸肉モアリ

猫脊形　銅

同　ホリ上低シ

異体浪形　正鐵

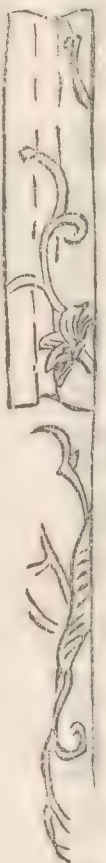
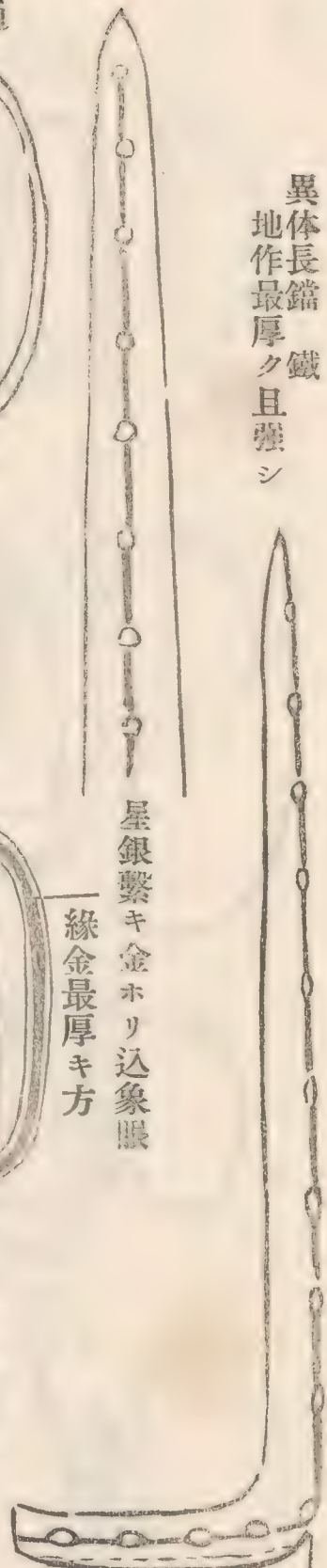
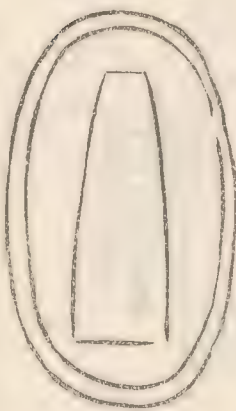
同　肉置最强シ

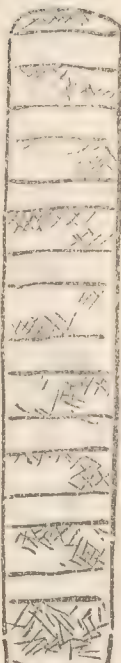
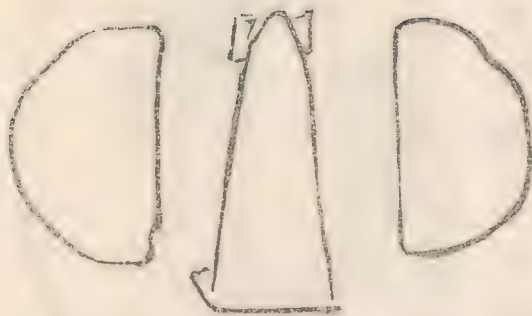
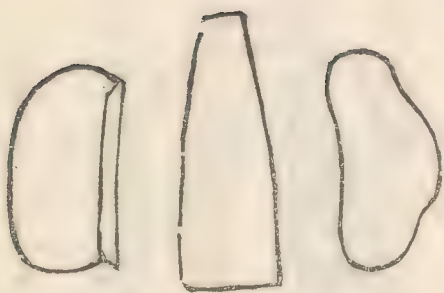
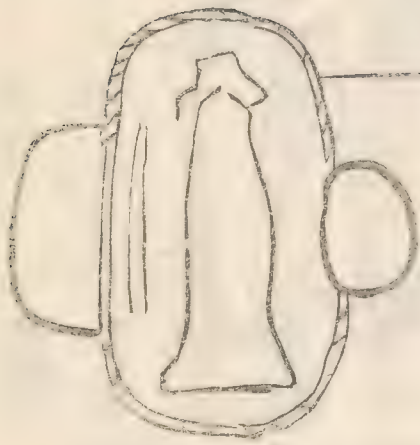
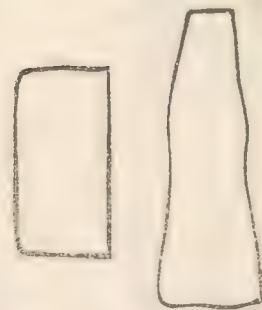
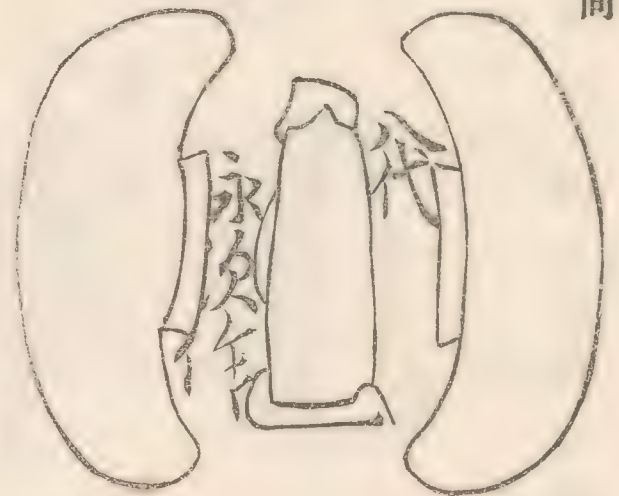
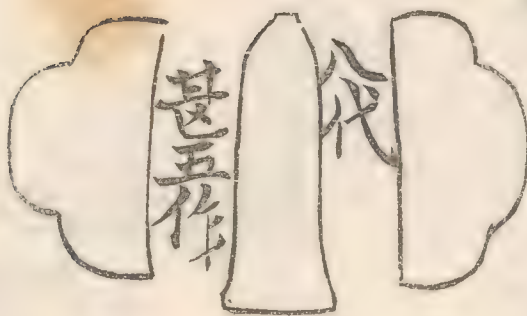
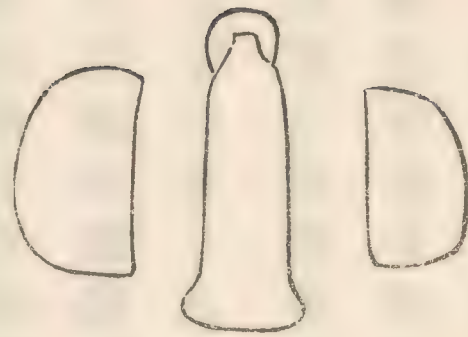
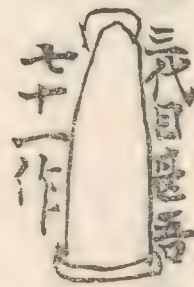
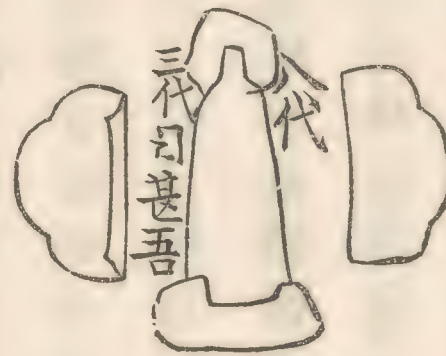
太皷形　淺キ式

金布目象眼

同　深キ式

樋形　眞鍮張金象眼但掟物　此式最稀也

戸樋形但自然　最厚キ方

ホリ淺シ　眞守　ホリ淺シ

因ニ云中心緣ハ西垣勘四郎ノ得意タリ春日其他絶テ無シ此作實ニ稀ナルモノトス其勘四郎ハ銘鑑ヲ摸シ往々眞ニ迫ル此ハ拘ハラサル如キ所却妙ナリ

異体長鐔　鐵
地作最厚ク且強シ
此星特ニ大也
星銀繋キ金ホリ込象眼
縁金最厚キ方
此線大タカネ也
但シ天上金ヲ受ケシメタルナリ
通例形
ワカシツキ
一種
笄ノ類　鐵
銀布目
初代
眞鍮ホリ込
象眼ナキ所地ニテ凹トナル
同
ウラ無地
同

同
同
銀布目
甚五作
同
同
二代目
代
甚五作
同
同
代
甚五作
同
代
永久作

同

三代目

年齢ヲ切タルハ此外見ス

二代三代とも在銘もの多し二代目は左に八代右に甚五作と切るは通例の如し或は八代と左に永次と右に切る又甚の字に凡四種あり即甚甚甚甚等なり又五の字五に造るは常にして稀には五と三畫に畧すもあり三代目の五は吾に造るとは最前説きしが代と名と左右に分ち切り八代とは通例切ることなし右に出したる圖は殊に念入の作即異例を示すのみ又三代目の銘振吾の字に見所あり吾の口の畫第一と第二及第三稍離る如し

別に八代紀永と銘する鍔あり此作名曾見聞せしをなし勿論志水家譜中に見へすといへとも作行を以推せは二代目に近し或は紀は志水の本姓にしてそれと永次の永とを取りかく切りしにや(圖下の圖部に出す)

○神吉家

初代甚左衛門

細川忠利公のとき次細工人となる

此作見す其家筋にも傳へすとそ

二代以下數代間總て詳ならす

壽平 正忠

此代を神吉の祖父と呼ふ蓋樂壽より溯のほり稱すなり

藩公の命を以鐔師の祖林家(春日)一式相傳すといふ

作行總て春日に法とり藤八作に髣髴たり其實大に下るへし

地鐵も春日傳ゆゑ第一しまりよく只惜むらくは鐵色稍赤味を帶ひて品格至らす

鍔の切羽臺等作り掛亦春日に似たり但肉置に至て稍ボツタリとするこゝろあり其中心穴の刻印春日三代に似て非なり

專ら透物を作り又象眼ものもあり其カツラ菱の如きは見事なり但し其法春日より得るも稍大形なり枯木象眼は品格最劣る如し諸作上々に至らすといへとも當時正統の作人たるを以隨而其名著るといふ

明和三年生文政三年死行年五十五

壽平 深信

此代を神吉の父と呼理由前代に同し

作行總て父に似たりしかし力及はす鐔重に透しを作り在銘もの多し肉置象眼ともに總家法株守に過きす他の奇なし略す

寬政十年生嘉永四年死年五十六

甚左衛門正康前名壽平次樂壽と號す

父祖の跡を襲き次細工人となる

此作地鐵極めて精且美にして每作形狀より象眼法及透、鑢、鑽、槌等一として精妙ならさるなく誠に最上の作たり其父祖は勿論肥後古今作中林又七を除く外皆三舍を避くへし

鍔緣頭鐺小柄馬針等皆あり其象眼又は彫種々ある中に就き最著明なるは二重唐草幷枯木及諸透際に入れたる極細の金緣等也甞舊藩老某氏のために造りたる金具一式あり地鐵なり金象眼を以桐紋及二重唐草を造る其法全面殆餘す所なし此作の如きは眞に又七に迫るものゝ如し(此の具は近頃宮内省江内獻になる由)家藏にも鐵金具あり右の精作の如くならさるも亦逸品とす彼の有名なる枯木彫込象眼たり甞樂壽見て余に告け云ふ此は壯年の時の作に係れりと抑枯木象眼は唐艸に比して却雅致あるかたゆゑに往々高尙家の好みに入る又此象眼は

肥後金工皆作る然れとも其絶品と稱すへきは前に又七あり後に樂壽あるのみ(又七の枯木は凡三種あり長短と一種珊瑚の枝振のことときとなり樂壽は只二種にて長短とす枝幹も又七とは自つから異なる處あり)

又枯木に彫込と布目と二法あり但し又七樂壽を除きて多かた布目にて入る例とす若彫込のものあれは槪して拙劣取るに足らす元來樂壽の作はタカネ底弘に入りてありゆゑに第一金色の光輝あるは云ふ迄なく強くして容易に拔ける害なし其金と手間とを惜まさる作なれは品能く價あるは勿論たり他家の作は此點に於て最及ひかたし誠に工作は徒に形狀の如何のみならす其用意の關係大と云ふへし樂壽の勝れたる所以亦此に在る如し

此作鍔及緣頭等の地鐵に一種のハダものを見る其狀雲の如く又或は蟇の膚の如く或は芋根の如し盖し此法矢張又七より化來のものなら

ん妙趣他人の夢たも見る能はさる所とす然れとも僞作は重に此法を摹すもをかし盖益其僞作の及はさるを見るへし
鐵色着法亦春日傳に依り猶多年の研究を加へ光澤餘りあり抑色着の事は作者の重んする點にして其出來不出來は數百年後にも關係すへしといふたとへは同肥後作者同色着法を以てするもまゝ別人の作に出る如き感ありて往々鑑定家の異議を生せしむることありと樂壽は常に此に注意を加へ毎作例に必す數十日間を色着に費やしたるとそ然るに其法大に秘し當代にも傳へすして沒す此に於て春日傳來名代の該法全く絶ゆ惜むへし〳〵
余曩に熊本に在り餘暇を以て金工鑑定上の初歩を樂壽に受く今此編の企は實に樂壽の賜なり樂壽口を開けは又七〳〵と云ふ其作行を説く深切にして人をして金工門弟の如き感あらしめたり又謙遜にして先輩諸家の作を見毎に力及はすと歎す實は樂壽の力或は諸家の右に

在るも左たらさるへし窃に謂諸家の如き樂壽と年を同しくせさるは幸にして樂壽の不幸ならん余は樂壽を稱して又七後一人となす決して過稱にあらすと信せり

或時作行精粗の論あり樂壽云春日代々人の賞する所なり然共眞に精工たるは又七一人のみ今試に其摹造をなさんにたとへは紋透にして又七には凡一ヶ年を要すへし其二代三代共に一ヶ月にして足れり云々樂壽出て初て又七の精の精たるを彰はすもの樂壽前身是又七か

熊本坪井には細工人多し所謂坪井細工大かた樂壽前後の出なり樂壽作桐、唐草、枯木の類僞作多く出つ其出來よきは眞となし通ふるもありとそ或人鐵金具(二重唐草)を余に示す且誇り云神吉の精作なりとしかし余は幸にあさむかれさりき後樂壽に告けしに樂壽大に笑ひいふ樣それ二重唐草は最鄭重の作たり一生涯多作すへき限りにあらす恐らく春日初代といへとも然らん余の如きは僅に二三作あるのみと盖其

難想ふへし（此時樂壽金工を廢しおれは生涯云々の言ある所以なり）緣頭の式丸形、深丸、鼻クリ、太鼓、樋、壺口、形鐺は泥摺、芝引、袋、諸式皆あり概ね春日の式により或は變化し來るもあり

今藏品中に就き其非常の作に係るものをあくれは左の如し

鍍七所揃 但シ裏瓦略シテ圖セス又此鐔ハ春日式薮手透象眼同一タリ亦略ス

泥障形（御家刀用）

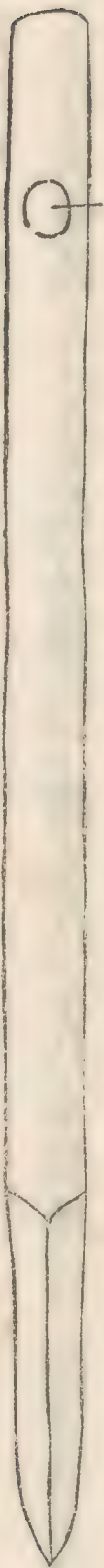
長鐺鍬形　眞鍮

馬針は殊に勝れて見ゆ第一諸家にくらへて形よく勢亦あり（肯自から改良を加へたるならん定其說もあるへきに聞洩らせしは遺憾なり）然に正作は甚乏しく世間神吉〳〵とはやすもの大抵皆坪井出來なり正作の一本及其式を示す左の如し

平肉形　牡丹金ホリ上厚布目据物ノ如シ唐草金張金

ウラ無地

龜ホリ上金或ハ雲又ハ渦ノ類布目象眼唐草又ハ雲等毛ホリ

蒲鉾形

ウラ無地或ハ銀布目スリハキ又雲毛ホリ表ノ如ク入ルモノアリ

初の式は殊に稀にて後の式は通例たり但し僞作は後の式に多し僞作は第一針先鍛鈍ふく正眞は極めて鋭なりこれも見所の一なりとす鍔櫃の式幷切羽臺は大かた春日式に依るこれを略す

又金工鑒定も肥後第一と稱す又其刀劍拵方に至ては殊に深く奧儀に達し從前は藩公の指領初一家中高尙なる造りには大抵其指圖を受け又刀劍も甚好み自から鑑識尋常に超ゆとそ

樂壽性質極て温厚品行固り方正色白く身高し齢古稀に近くして五十前後の人を見る如し平生神佛を信仰し嘗祈願ありて若干年間肉食を禁せり然共敢てこれを人に告けす又人家たま〳〵之を供せは辭せすして食ふ蓋其厚意を空しくするを恐るゆゑなり而して心に誓ふ所あり則一食に對するに幾日間の禁限を延へ以て償ふこれかため一生禁を解く能はすと其謹嚴かくの如し人皆服すといふ

文政十四年生明治十七年八月三十日死行年六十八

當代忠八實は深信二男

此作透鍔は略實父の意ありといへとも總て作劣る子某作なしと云ふ

○遠山又七

遠山鍔と稱するもの賴家賴次の兩銘あり父子か兄弟か詳ならす賴家在銘の作行地鐵しまり甚堅く見ゆもの多し蓋し一種の作にて多くはヤスリ地又山吉鍔の小透しに似たるもあり耳は常に薄作りにて打返し多しまゝ透鍔も見ゆれと疎にして遠見の松の類に過きさるへし

賴次亦堅作りの方なりしかし此作には象眼及据物を見る

遠山又七の名久しく著はるといへとも賴家賴次共に鐔の外作見へす此作時代分明ならす式云春日初代より下らさるへしと一說に清正公の抱とも云ふ又地鐵堅き故に其作幾分若く見ゆるもあるへし

○谷傳次

此作名あれと正眞の作存するは稀なりと嘗一鍔を見る銀布目を以銀杏葉を打達に造る一種の作行とす又嘗て同銀布目雲の縁を獲る其式長且大作行前の鍔に略似たり

右作行に據り概評するときは勘四郎にあらす寧ろ彦三の法に近きか如し或は其門より出るもの品は西垣三代よりも猶下るへし

○三角幸次 正春（こうの字詳かならす假に幸に作る）

此作は最特種なり重に白銀もの以て精密なる彫を作る目貫及縁頭共多し鍔は却て稀なり其鐵ものは余いまた見す

目貫の作は肥後多くの金工中絶てなくして獨此作に多く見ゆ其裏に△の形を付す案するに此印は其三角なるへし

又好て烏銅を用ゆ其魚族を造るもの十中八九に居ることし蓋し平生得意にありしならん就中その鯰は諸家と大に異り痩長のかた且鰭尾

髭等精密に彫る鯉亦同じ

縁頭は銅眞鍮等にて重に彫上又据物なり地は通例石目稀には魚々子地もあり(布目象眼ものは見す)地は總て厚作りのかたなり肥後諸家と作行別なれは知らさるものは他方の作と疑ふもあるへし一説に性癖あり一生他行をなさす然にいまた會見さるものも能く作り人をして驚かしめたりとそ蓋奇人なり

此作亦時代詳ならす一説に三齋公の時八代に住すといふ其銘に七十と見ゆるもあれは長壽の如し左に作例を示す

家藏中其老後の作殊に精作なる赤銅鍔あり非常の出來と認むれは全圖を下の圖の部に出す

○萬日坊 春日村萬日山の住僧

鍔の作あり地鐵は略春日に類す或は又七の前作りとも疑ふへきものも見る遠見の松又霞透等なり皆厚肉のかた上品にはあらす又小道具類の作は絕て見す

一說に寺又七の近隣にて常に其工場へ來り時としては戲に造りし事ありとも傳ふ又一說には又七の甥也とゝにかく僧家の一時戲作なり奇といふへし此外總て詳ならす

○諏訪家

初代 彦之丞 正乘 慶長寬文の間

二代忠左衛門 正次 寬永寶永の間

三代忠左衛門 正道 延寶寬保の間

四代　彌治平 正之　元祿寶曆の間

以上代々作の有無詳ならす

五代目幾平 正足

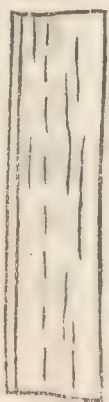
此作地鐵細やかにして麗はしく一代の上手と稱す緣頭は西垣式よりは肉置强きかた也象眼ものは布目にて櫻花又は唐草の類を作るホリ込据物はいまた見す其唐草の仕掛は大かた燒靑兩金共入れ交せに用ゆ形狀勘四郎に似たるもあれと其實葉先蔓先におゐて自から異るとかく延ひ勝手にて且西垣に比せは稍密なるかた也枯木は多くは枝長く垂れ弱く見ゆ鐵太刀金具も稀にありこれも肉多く形亦大なる方象眼は矢張唐草の類也諸作西垣三代と甲乙なかるへし但鍔は稀也通例緣頭の式一具を示す左の如し

山道形　巾稍廣キ方

道深ク且廣キ方

糸穴大ナル方

壺形　腰肉平ナル方

天上金共也但シ蠟吹

毛ホリニアラスハダナリ

玉緣金布目ニテ入ル

此象眼吹寄櫻但シ陰陽ニシテ陰ノ方大形ナリ（陰陽大小ニ作ルハ彥三ト此作トニ見ルノミ）

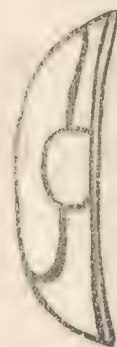
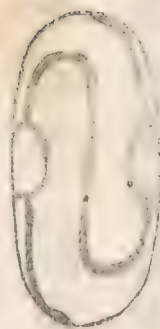
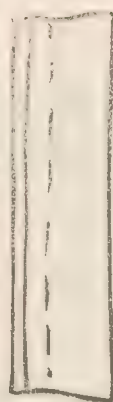
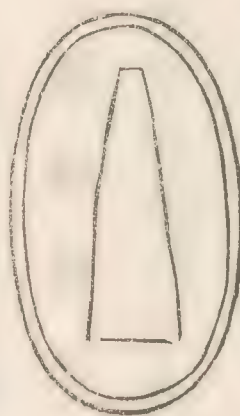
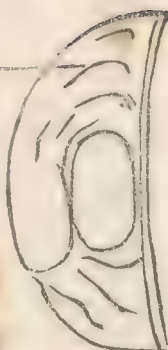
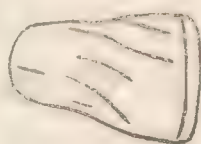
享保十七年享和三年十一月死行年七十九

六代目を國吉といひ七代目を大作といふ各作ありといへと傳へる程のものとては聞かす八代目即當代に至る

○谷清兵衛

此作行美にして地鐵亦美なり近世の上手とす重に縁頭の類を造り鍔は少なきかたなり

象眼は吹寄櫻カツラ繫き、唐草、又まゝ天龍も見ゆホリ上ものもあり其涙等は見事なり唐草の狀幾平より密なるかたにて吹寄櫻は花至て小にして幾平の反對なり龍は瘦長きかたカツラ菱は藤八に似て稍小形又紋散は象眼甚美なり圖下に出す

總て象眼の金色は上其いろゝ分及ホリ込又据物の諸作はいまた見す鑒定家例に幾平か清兵衛かと同位に稱す(實は時代の差もあり幾平の次に位すべし)左に作例を示す

天保十四年死七十餘歳といふ此他詳ならす
二代目も清兵衛と稱し二男四郎兵衛と共に作ありとそ(世間に在る清兵衛作鑞切羽類甚見事なりもとより初代作もあるへし又二代二男共にもあらんしかし鍔等は其作あるも恐らく彼の坪井の類なるへし

○中根平八郎

舊藩士にて餘暇の作あり專ら正阿彌寫を作る(御家刀用信長透及唐人笠の類)其銀ホリ込象眼の如きは最工にて中には眞に迫る又泥摺鐺の作は其式好く妙なりたゝ惜むらくは一生摸造を事とし自家の作とてはなし(御家刀用泥摺鐺は其式甚やかましく第一月形肉置等を以作者工拙を判すへし此作研究至れりといふ然とも猶神吉甚左衛門作には及ひかたし彼は自然になる如く此は苦辛の處露る其差概ねかくの如し

肥後刀拵方に高熟にして神吉に亞き名あり近年歿すといふ

○坪井諸工

吉田德治　　坂本彌市　　坂梨五郎兵衛　　宮崎宮藏

宮永子之吉　　野田仁一郞　　桂十作　　田邊保平

等は屈指なり

諸工彫象眼各々得意ある如し德治は摸造ものをよくし其甚五寫の如

きは最工なり仁一郎は專ら毛彫もの著名なり保平は晩年悟る所ありて大に面目を改め所謂坪井細工の臭氣を脱するに至る此他は一々評しかたし略す

小堀惣五郎亦坪井に住す此作專門は鎺、切羽、シトヽメ類にして所謂白銀師なり作行最上に位す又鐔其他小道具の地造亦工なり但し鐵ものは一切作らす

國に云曰今肥後刀拵をなさんに欠くへからさる工人四名あり鎺師小堀惣五郎鞘師前田巳太八塗師森田謹三郎柄卷師守永熊藏とす各絶技たり

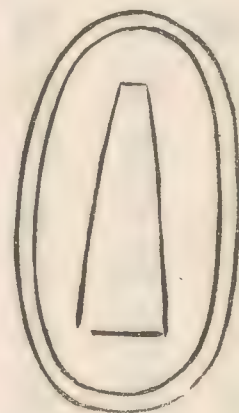
凡肥後古今著名の作者は以上序列する如しといへとも外に刀匠に在りては延壽國秀の如き又時の士人の如きも亦鍔縁頭等の作まゝ見ゆ然共甚賞すへき程のものはなし但し國秀は刀匠たけにて鍛錬法よく或は木目肌等もあれ共概ね堅きかたなり又士人と單にいへはちと空なれとかの宮本武藏の如き門弟筋とか又は時の劍道家の自作かと想

ふものを指す此等の作大かた武張一方にして味とては少なし
こゝに似て非といふへき作あり其時代作行ともに下らさる縁に在り
(鍔いまた見す)凡二種を認むへし一は春日に似一は西垣に類す或は神
吉の祖父より先代の作かといへと亦信しかたし左れは江戸熊谷源七
等の肥後寫しかと見れは第一時代適合せさるのみならす作行に於て
亦大に疑ふへし京攝間にも從前肥後寫少からす然共そは近代の事に
て古きは聞かすとにかく二種共手際能く西垣二代位より下らさるも
のゝ如し此等の作從前踈漏の鑒定に春日又は西垣作と一口にいふて
通りしならんか然に余は旅作と極める外なし今二種圖式左に出し參
考に供す

平肉ノ方
花心甚密ナル方

木ホリ上銀スリハキ枝先金花金銀

ワカシツキ
天上緣金ト平ナリ
即春日式ニ似タリ

トヒ形
月銀ホリ込龜四分一据物艸金ホリ込渚ホリ上

ワカシツキ
緣金天上ヲ受ク即西垣式ニ似タリ

櫻花は肥後諸家皆ありといへとも右圖の如き立木に作るものは春日初諸工絕てなし又月龜共に西垣にある例なれと此草ホリ込に作り且金色殊に上等なり是西垣になきところとす地鐵も何分異り二種ともに稍粗なる如し

又別に人物と籬及草とある二緣を見る其作嘗神吉樂壽も見て大に疑ひ戯て勘四郎か七分又七三分又旅の(旅といふ事前にも記せしか「たひ」とは熊本のいひ習ひにて總て肥後外をいふ肥後物鑒定上必す入用の言葉とす)勘四郎なと丶云ひてやみたり

抑金工鑒定は末事なからかたしといへは可也かたし惟其作行に付二三の掟を見出し時代亦適合すれは直に決すへし餘りいろ〳〵と考へ

過すときはひとり決する事能はさるのみならす終に弊も生すへし若それ二三の掟を認むれはたとひ他作の在銘に在り共鑒定上におゐて却銘をば僞となして可なりしかれとも譬は山水家の畵にもまゝ戯には狂畵なきにあらす錦畵かきにもたまには唐畵を寫したるもあらん概して其腕前次第にて他流のものを作ること甚難きものにあらす又實は僞にもせよ僞の顯れさる限りは正眞と同し價あるは勿論たるへし又確と掟を見とめさるもとこやらそれにといふ事もありとこやらとは元來曖昧の言なれと亦頗味ある如し廣く通する言とすれは鑒定上知らさるへからす

掟の事前項已に説きたり所謂掟とは是非共作に伴ふてあるへき事なり研究せさるへからす一口に二重唐草は春日の掟物なとゝいへと勘四郎にも又近くは神吉にもよくあり下りては坪井細工にも多し猶山水圖の文人にも狩野にも又下りて錦畵かきにもある如し掟とは其法

立の謂にして唐艸の一重や二重といふに止るへきにはあらす要する
に地鐵、耳、切羽台、又穴、タカネ、ヤスリ、槌、据物、象眼、彫、其深淺廣狹布目には
細大疎密又其物形の布置及地鐵と關係象眼の金色如何等其作中必す
存すへきもの即掟なり僞作には常に相反す若まゝ似たるあるも所謂
至らすゆゑに鑑定家の必要は先諸家の掟を暗記すへき也然共また容
易の談にあらす博く覽て他と比較上より入ること一方便か
前人云書畵の鑒定は猶刀劍鑑定の其鯉口三寸離るや忽ち決すへしと
同しとは名言也金工は書畵刀劍の如くならす高の知れたる掌上一見
足るへきも然共鑑定の理屈は同し事なり久しけれは迷ひ生せんゆゑ
に初に於て二三の掟を得は云々說きたる所以なり
昔田舍に名所舊跡好きの者あり多年机上に名所圖繪の類を讀み暗記
す然るに曾て門を出ることとなし老後初て東海道を過き由井ケ濱を實
地に二ケ所見たりとの奇談あり此事移して鑑定上の戒しめとす抑田

舍人は學はさるにあらす所謂机上の獨學にして實境照査のことを欠きたる責とす世間の鑑定書は大抵皆名所圖繪に過きす今この編も亦同しこれのみに依賴するときはかの田舍人たるを免かるへからす此に終りに臨み贅記することしかり

肥後金工錄 終

附　録

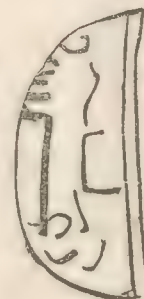
○細川侯三齋 忠興

公夙に文武の才を負ひ以て戰國の世に處す其功名籍々たるは世遍ねく知る所たりかゝる名將の器量にも拘はらす嘗千利休と友とし善し茶事風流をも極められ晩年又金工の事迄及ひ給ふ其作人獲て珍重す趙璧啻ならすといふ

作柄重に鐵物に在り其地しまりよく亦一種の作たり元來武將餘暇の作なれはもとより工人と幷ひ評すへき限りにあらすといへとも概して春日の美觀はなしむしろ彥三或は古正阿彌に近き如し試に之を譬を借り評すれは宛も逸品における如く他の三品外に在るものか世間公の作とて傳へ誇るものゝ大抵皆僞なり其正眞の作となすもの余たゝ數品を見るのみ中に就き最敬服すへきものは舊藩老有吉氏の祖先へ公手から玉ふところの鐔とす實に非凡の作行にして極めて雅趣

あり(圖下に出す)余亦幸に一二の正作を得たり其鐵頭の一具は殊に珍重する所なり依て特に圖を挿む

平山道形　異体
浪毛ホリ低キ方
平ノ字ホリ深キ方

糸穴角ノ方
稍尖ルコヽロ
片庵

因ニ云平山道頭ハ元三齋公愛刀歌仙作ノモノタリ(刀關兼定ノ作其歌仙ト號スル所以ハ略ス)原物ハ四分一ヲ以テ作リホリ平ノ字ケ様ナリ而シテホリノ浪ハナシ又其作者詳ナラス後世摸造刀起ルニ依テ時ノ作者コレヲ寫ス原物ニハ平ノ字ノ下槌目ノ如キ傷所アリ依テコレヲモ寫スナリトニカク肥後有名ノ式ノ一トス

或人公の作とて一鐔を示さる(これも唱ふ所は公より拜領ものと)其式引兩形にして燒金青金を以すゝきを作る其法布目象眼にて例に正阿彌作に見るものに近く甚信しかたし抑公の作の如きは古正阿彌には

或は似たるもあり全く縁なきものにはあらされ共自つから異る依て又畫を借りて試に論すへし公は高士の筆俗畫史の筆にあらすされは興來り意會するときは山水花卉手に信せて成ることあり重に水墨法にして着色は稀の方ならんたとへ間々ありても淺絳に止り即銀か又は銅位に過きす其据物彫上の精密の作は勿論布目象眼にても搆大なる燒靑兩金を以いろゑ分けに造る即取も直さす極彩色の如き作は恐らくなき所ならん

形式、及槌目、ヤスリ、彫、象眼、諸法共總て拘はらさる處妙とす中に自つから氣高き處を認む是公の正眞なるへし

鍔幷に縁頭類概ね薄造りたり間々革製鍔又塗縁等に於てとこやら作行雅なるものあり或は當時士人の戯作にかゝるものを後好事者公の作と觸れるもあるへきかとにかく多くある筈なし

又公は甲冑幷に刀劍をも作り玉ひ刀銘を千力包永と切り已に有名な

る一口を見たり相傳ふ公は平生手擢包永を慕ひしゆゑかく銘し玉ふと是恐らく附會ならん聞く所に據れは寛永のころ千力包永といふあり大和手擢の末にて初め土佐國高知金子橋に住し(高知住藤原千力包永作と切りたる押形を友人今村長賀の處にて見る)後肥後に移り公の相槌をなすと云ふ然るに千力包永は公の事なり公の銘なりと謂てはをかし新刀辨疑にも三齋の作と云ふ何の言そやと見ゆ余は刀劍の事は未熟ゆゑ委しくは論しかたしたゝ因に記すのみ

公は利休居士と刀劍拵の事研究ありと傳ふ余嘗細川家に乞ひ其大切なる遺愛刀信長拵其他種々の拵を見るを得たり各拵柄鞘の形より附屬小道具の取合總て妙ならさるはなし一説に拵は茶儀に取り其栗形は茶席の爐蛙は(蛙カヒル即サグリ)客裏瓦鐺等は道具又は庭前の樹石燈籠に擬せしものとそ其高尚云んかたなし眞に敬服の至なり

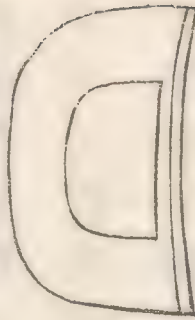
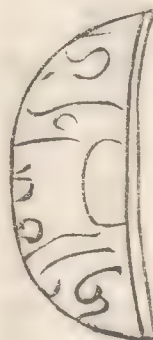
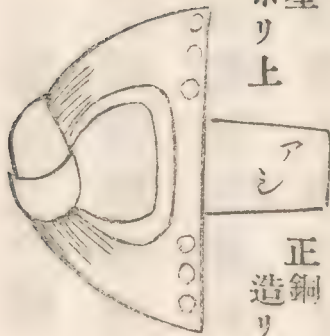
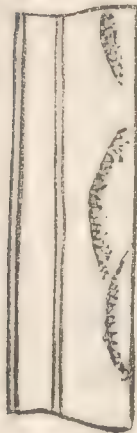
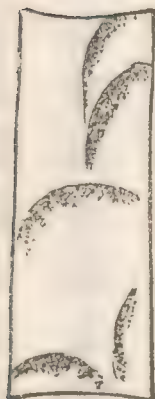
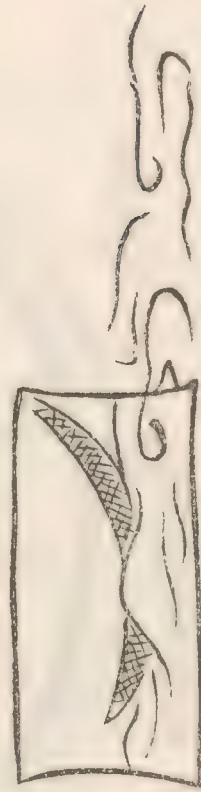
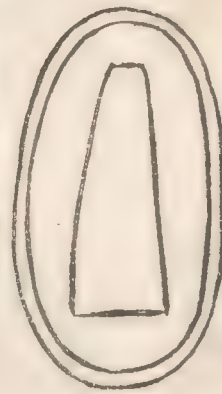
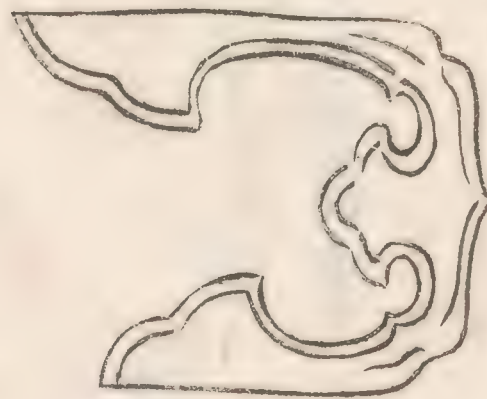
永祿六年正月十三日生正保三年十二月三日卒行年八十三

○**新免武藏**　玄信幼名辨助後二天道樂と號す（一說に其宮本と稱せしは母方の姓なりと）

生國播磨赤松圓心の末葉なりといふ寛永十七年の交細川忠利公の召に應し肥後に入る十七人扶持現米三百石玉ふ時に年五十七といふ（其劍道の事は世著名の談多し此には略す）

此作至て稀にあり鍊銅に拘はらす鐔縁頭共に一種の作也地鐵固しまりて一見双金の如し故に作行自から堅く見ゆ時代に於けるも若く見へ勝なり鐔の形は小形にして一種ナマコ透なり（透際厚く內に向て薄くすく）縁頭も總て尋常と異り多くは異體にて鼻操形の類又大丸形は最深く縁は樋及戸樋縁いつれも深造りのかたなり世僞物多く正眞は得かたし元來在肥七八年間にして殊に武門の餘暇の作なれは多くあらう筈なし

凡肥後作中最珍とすへきは三齋公及此作なりとす固人を以作を傳へるものかの作を以人を傳へるとは同年の論にあらす余嘗在肥中渴望

の餘一を得たりそは銅頭にして浪のほり上けたるもの作行彦三甚五兩家とも異り却て三齋公に近きかと思ふ神吉樂壽に質せしにこれこそ武藏なるへしと歎賞せり又外に鐵縁の一具を得たり浪に沈み月を造る作行亦一種なり武藏にあらさるもとにかく士人の作なるへし其他正物と併せ左に圖を示す

天正十年生正保二年五月十九日死行年六十四一説に六十二歳といふ

○清田石見守

三齋公の備頭たり關ケ原の役に武功ある士なり三千石を領すといふ此作名ありといへと多く傳はらす聞く其家筋に三鐔を藏すと共に木瓜形にして環耳スハマ櫃に造る他二枚は革キセにて其作行は總てかたく見ゆとそこれも武夫一時の作左もあるへし

生死年月等詳ならす大抵三齋公前後なるへきか

三齋細川侯作

耳ホ邊

シカス

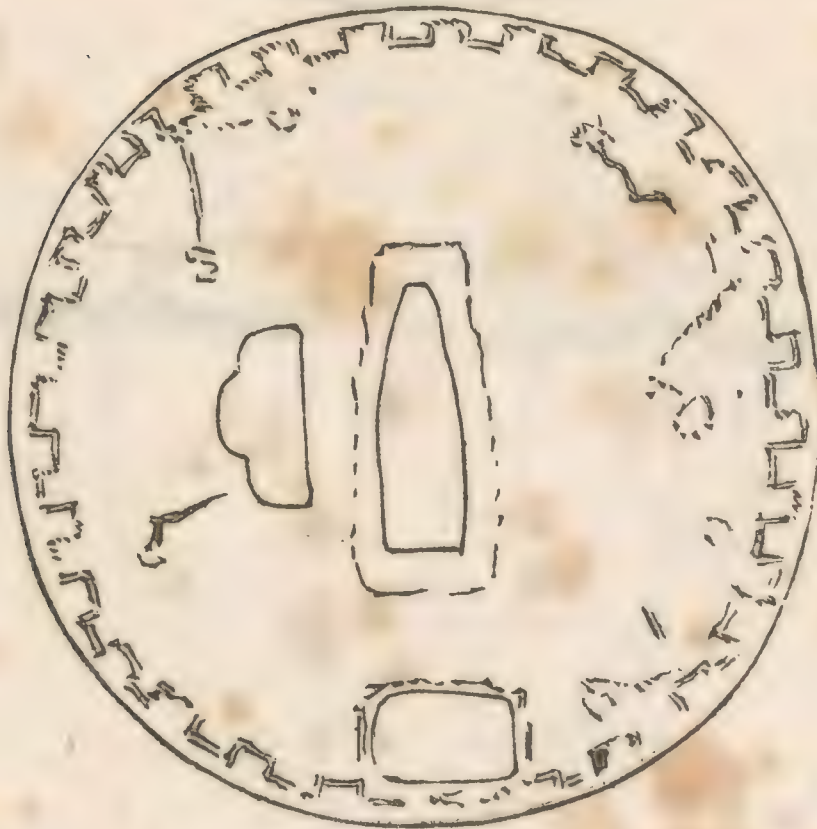
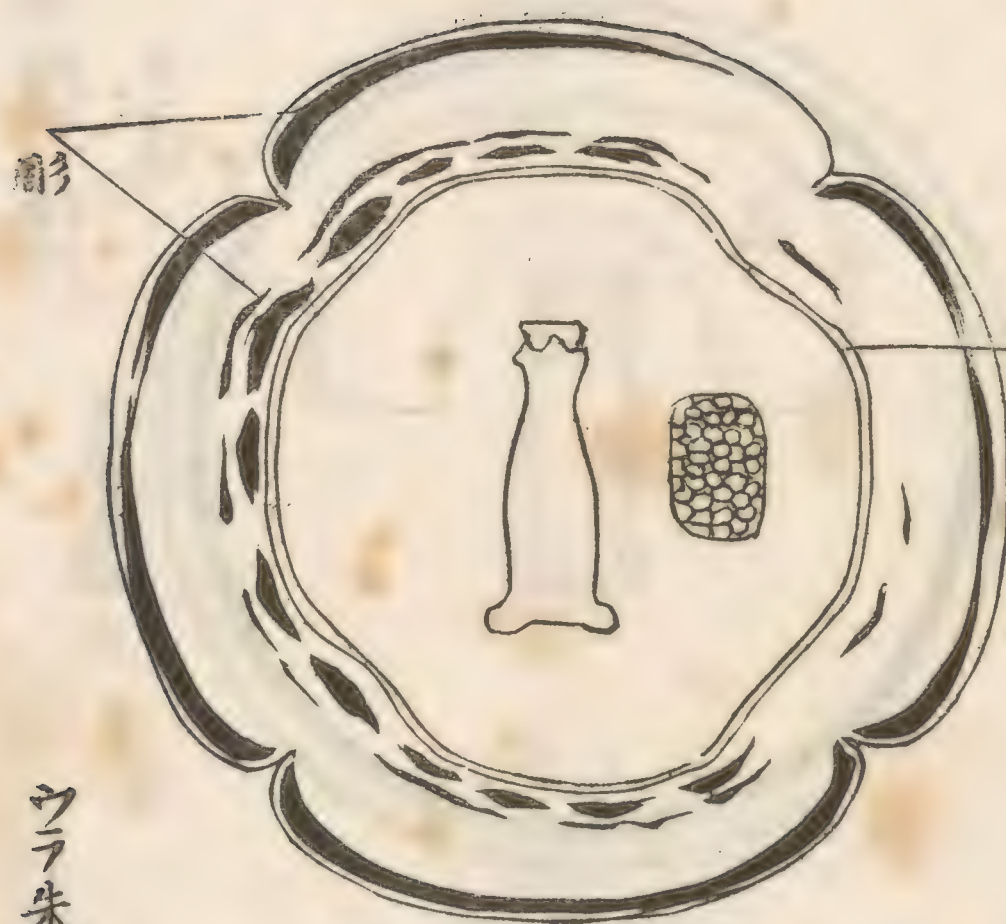
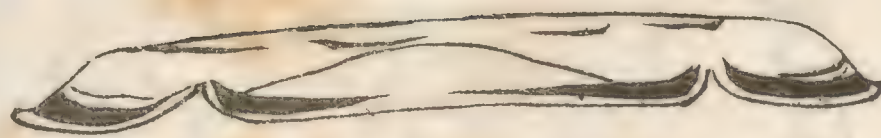
面取

青漆象眼

ウラ朱ウルミ漆象眼

门作

銀象眼但シ縁彫込内布目

ウラ门

同作類似
盂形ノ
影
銀ホリ込象眼
同側面ヨリミル
ウラ朱ウルミ漆但シ下地金フセ

新免武蔵作

厚耳透際表裏ヨリスク

毛ホリ

门作　銅

寸六

附録終

附圖
春日家初代作
紋透
金銘
銅
唐草ニ重ナリ
象眼総金
ウラ同シ但シ綸子象眼多ク存ス
同作
九曜唐艸共ニ金
耳唐草
ウラ同シ

门作

金象眼伊ル地紙ノ處嵌厚キ布目

音ハ彫込ニテ入ル

櫻及虫喰共ニ同シ

ウラ扇俯仰ニ櫻三

门作

葛菱金張金

ヌク

ウラ同

同作

蔦菱金　穴貫ク

ウラ同

スク

同作

太刀折紙透枯木金ホリ込象眼　耳角肉

ウラ同

枯木耳ニモアリ

同作　金銘

タガネ透　渦金張金

又七

ウラ渦六　肉置稍平ナリ

同作

櫻花ノ外面透霞同シ
綴縄目金

ウラ同

同作

耳打返シ

紐金赤銅ヨリ合セ

ウラ紐貫ク

同作

梅木金ホリ込象眼

ウラ同

同作

象眼金銀ホリ込 但シウラ銀ナシ

ウラ同

同作

象眼金ホリ込

ウラ同

冂作

耳丸　地ニカヽ

冂作

○ハ焼手クサラシ
菊目ノ毛彫稍大嵌強シ

同作

タカネ

同作

地ミカキ

タカネ

同作

燒手クサラシ

繋キ但シ地ヨリ低シ

同作

透肉置角ナル方

同作

肉置丸キ方但切羽台角肉

同作

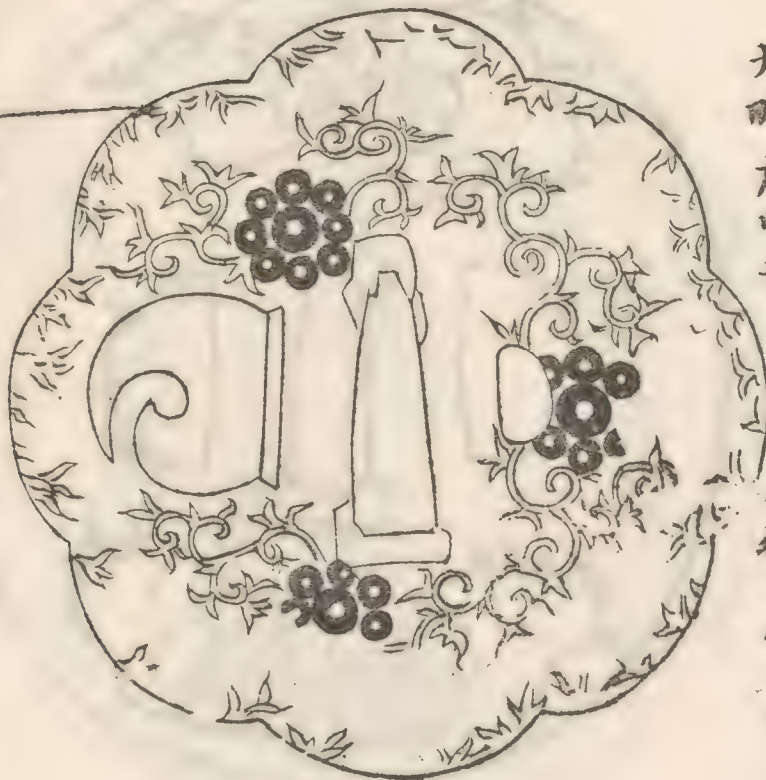
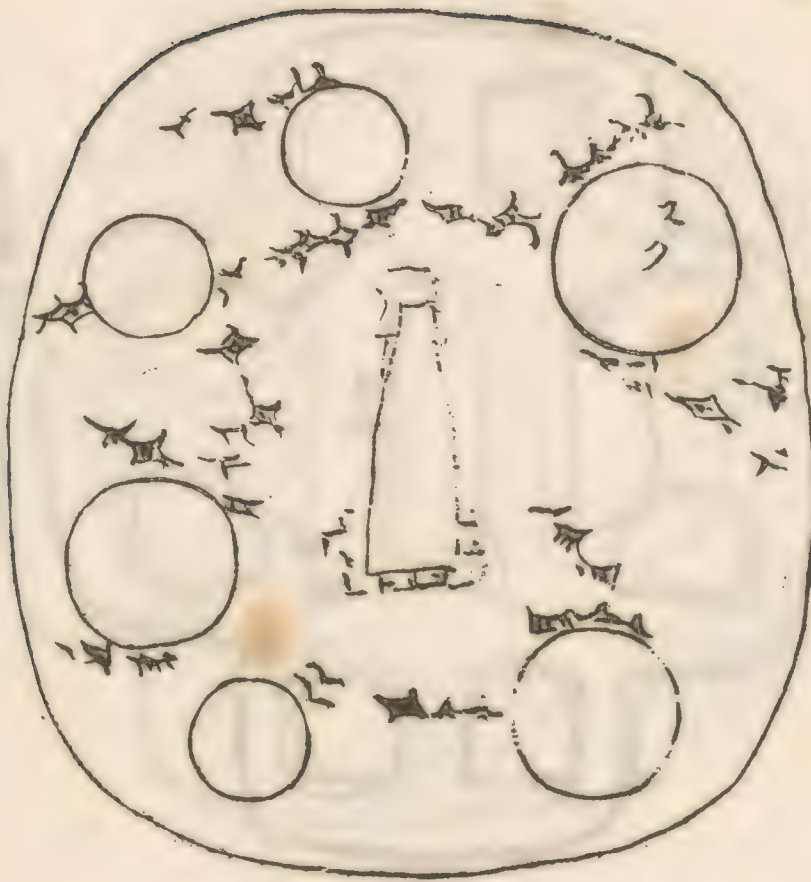
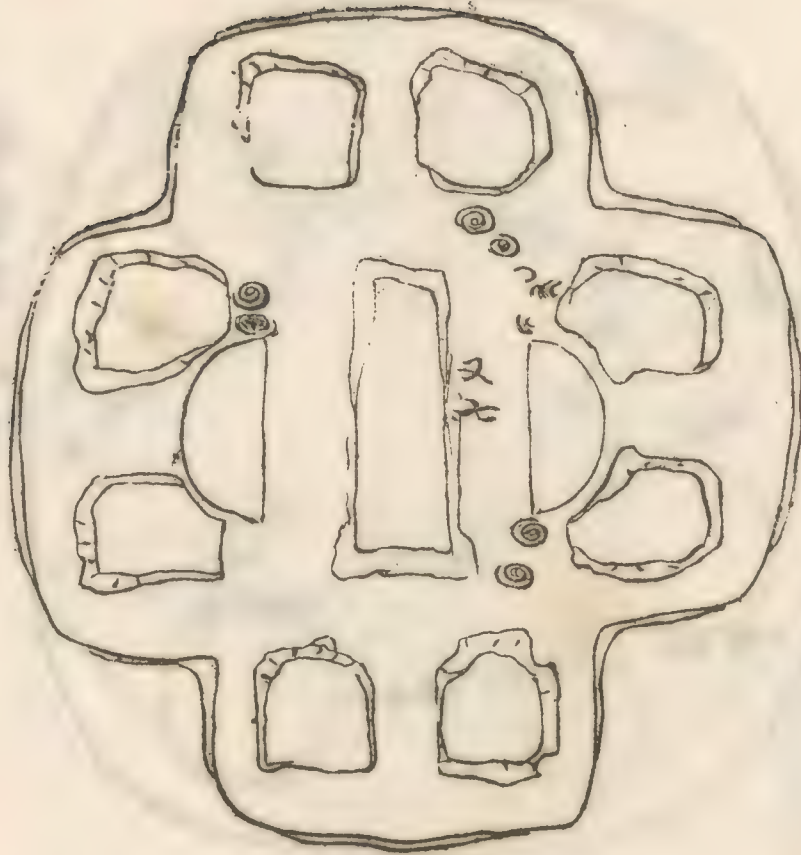
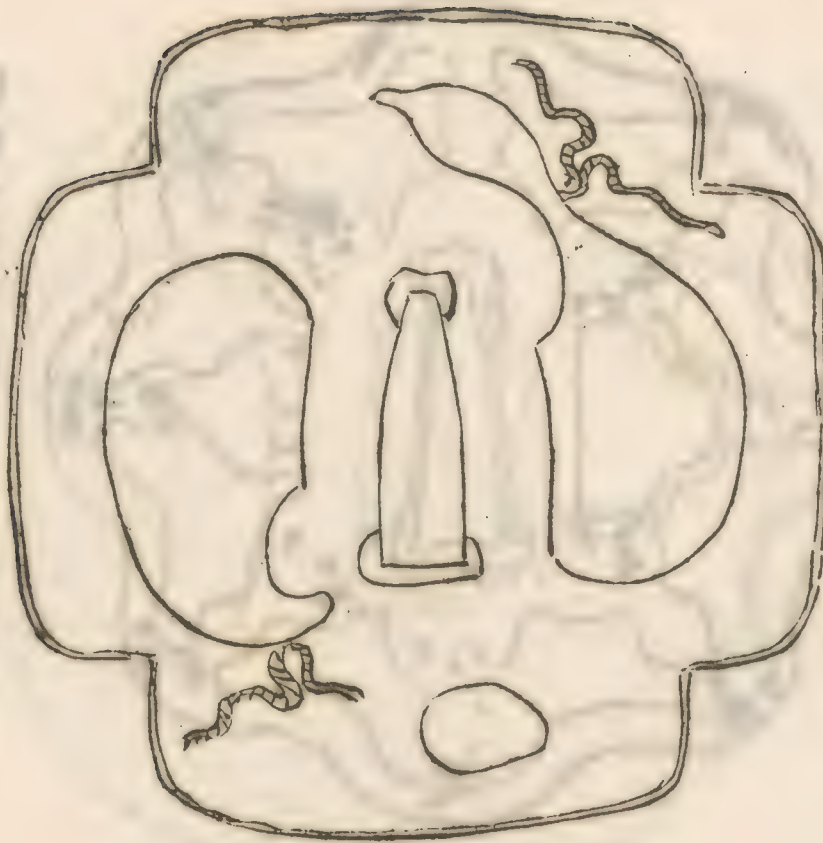
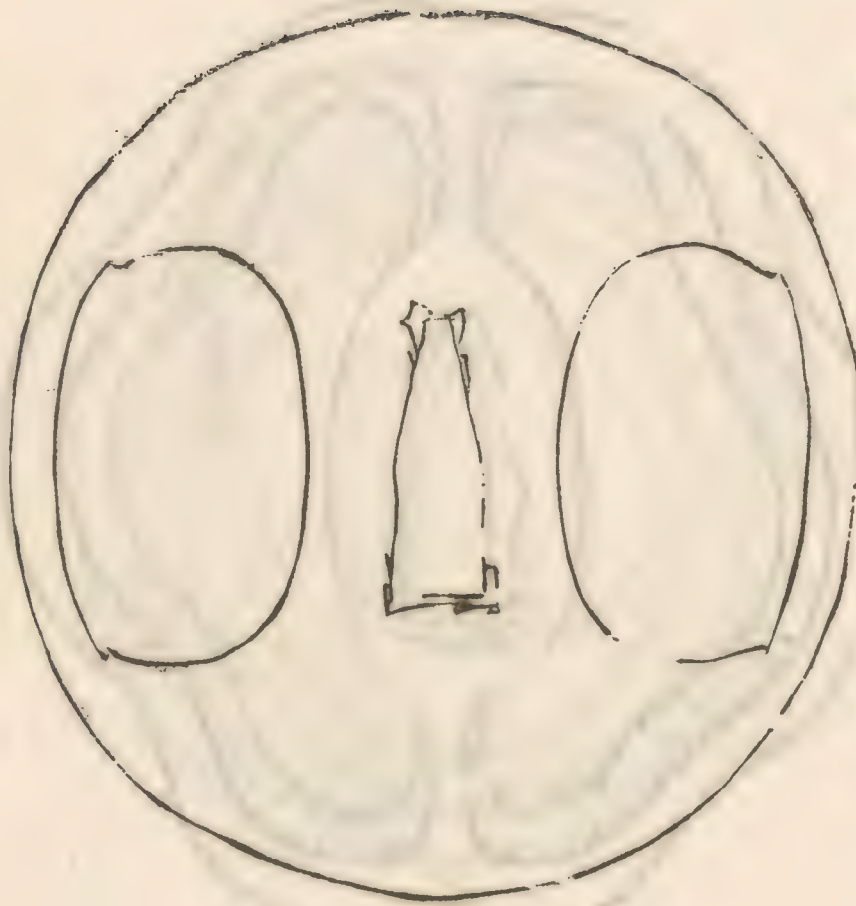
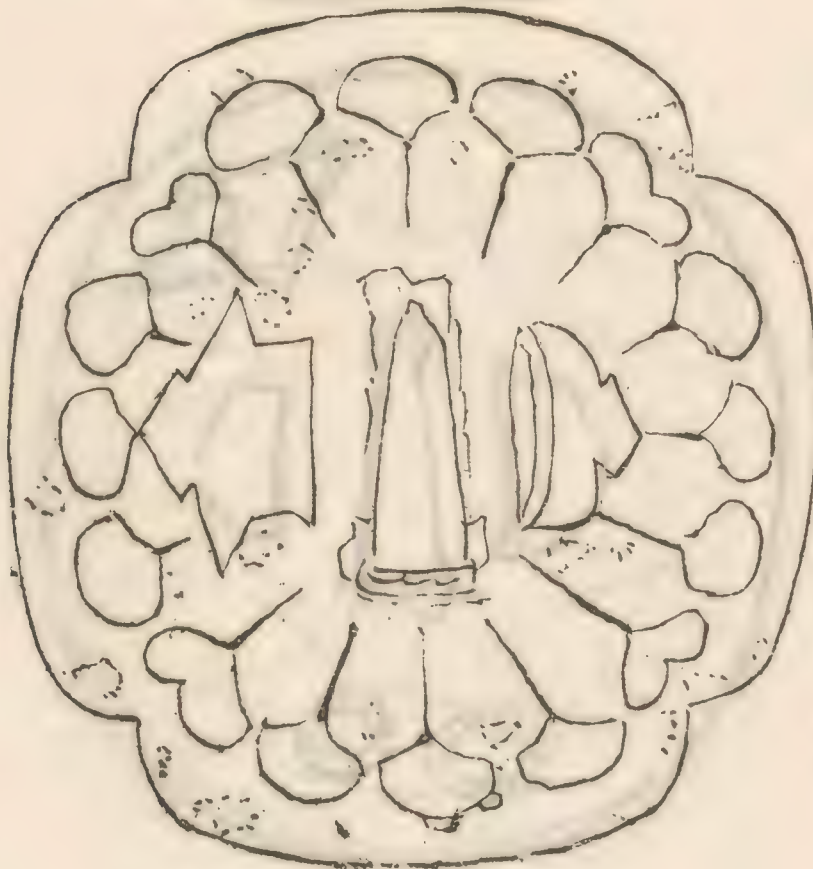
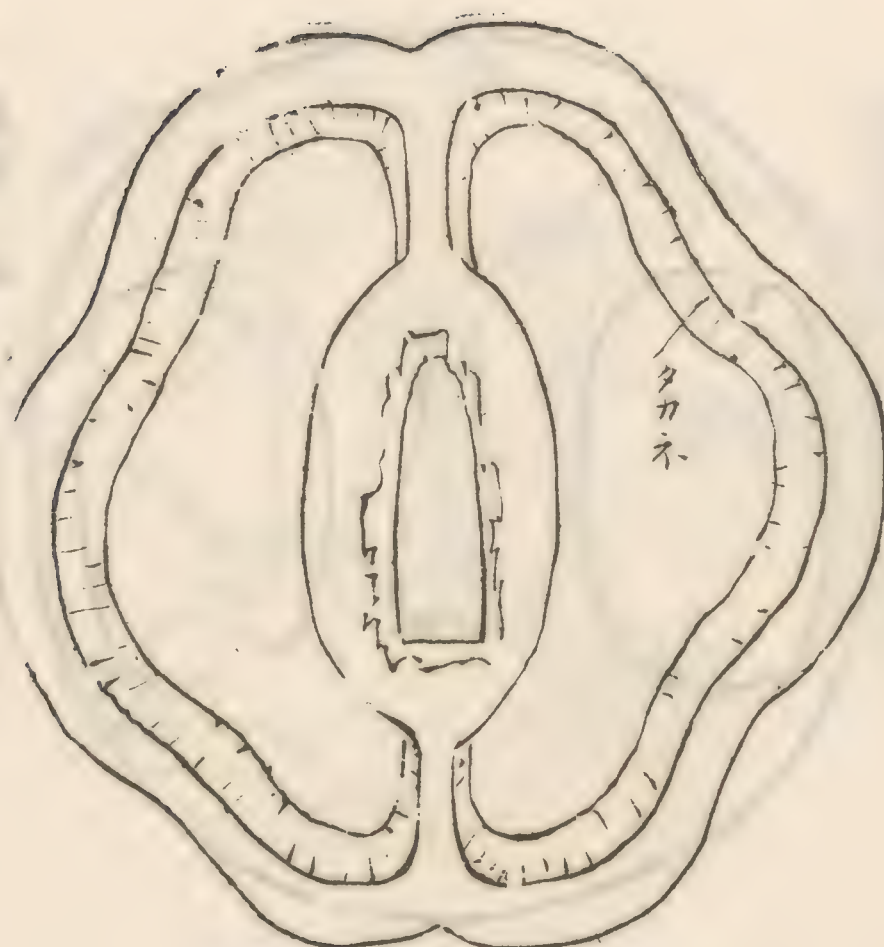
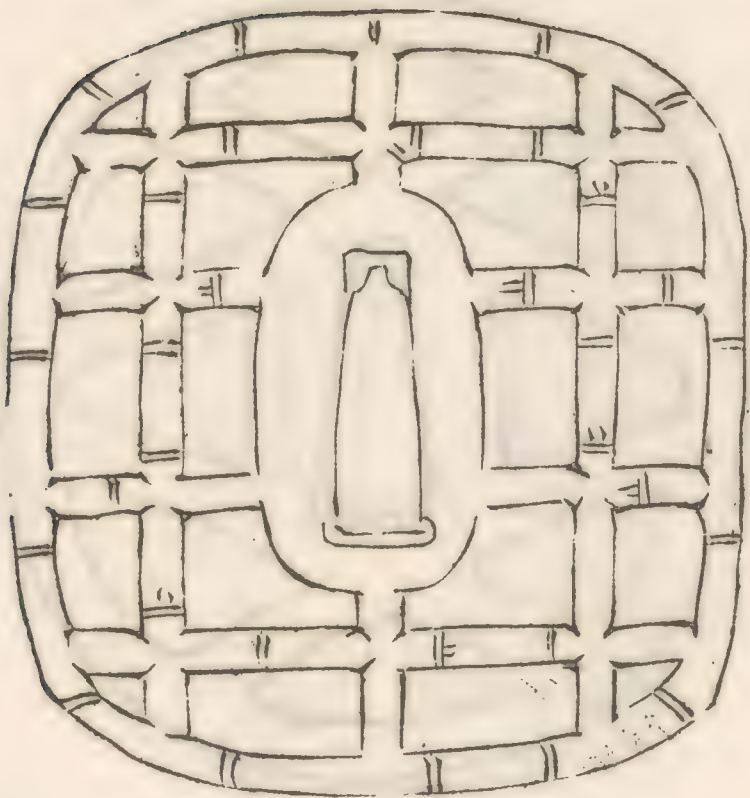
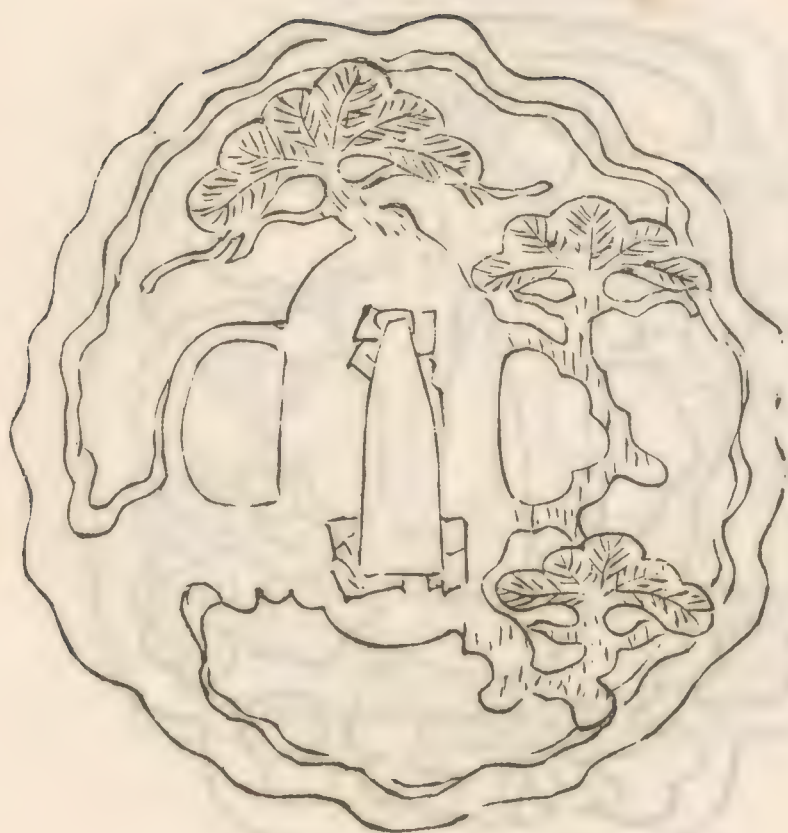
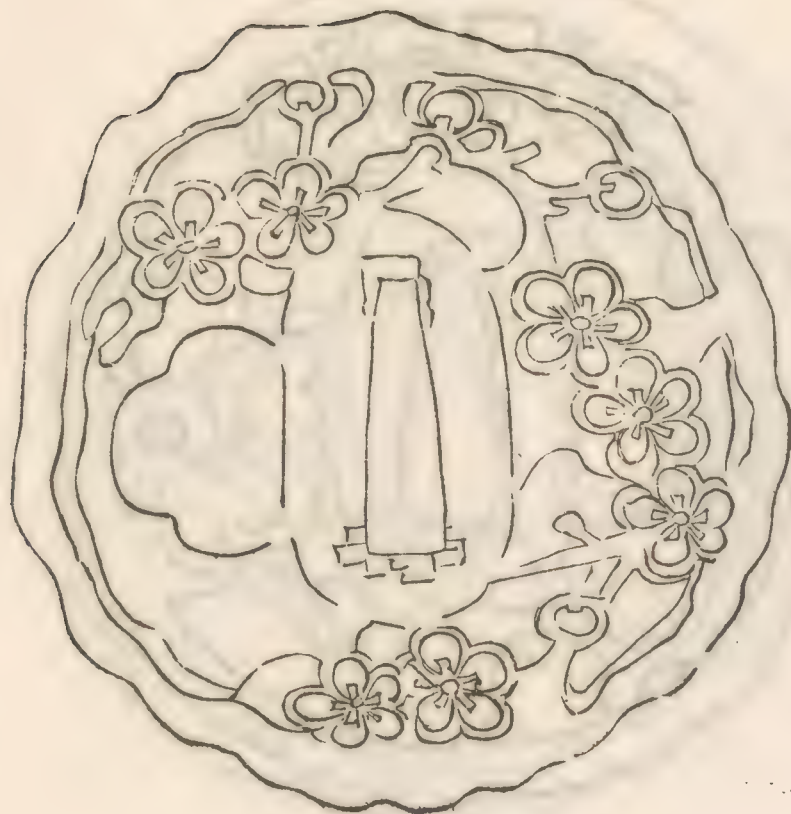
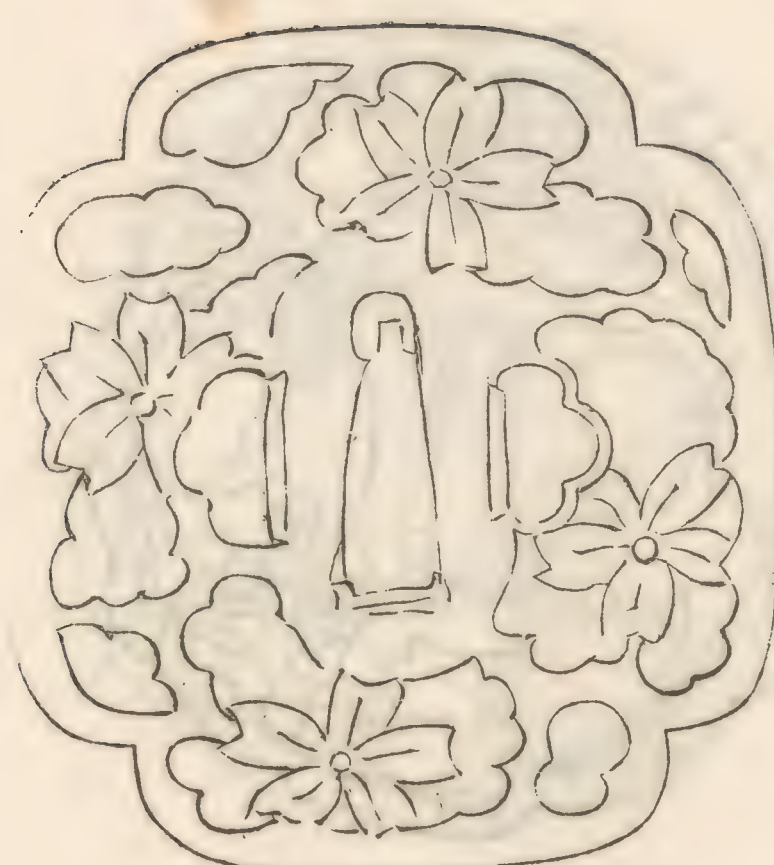
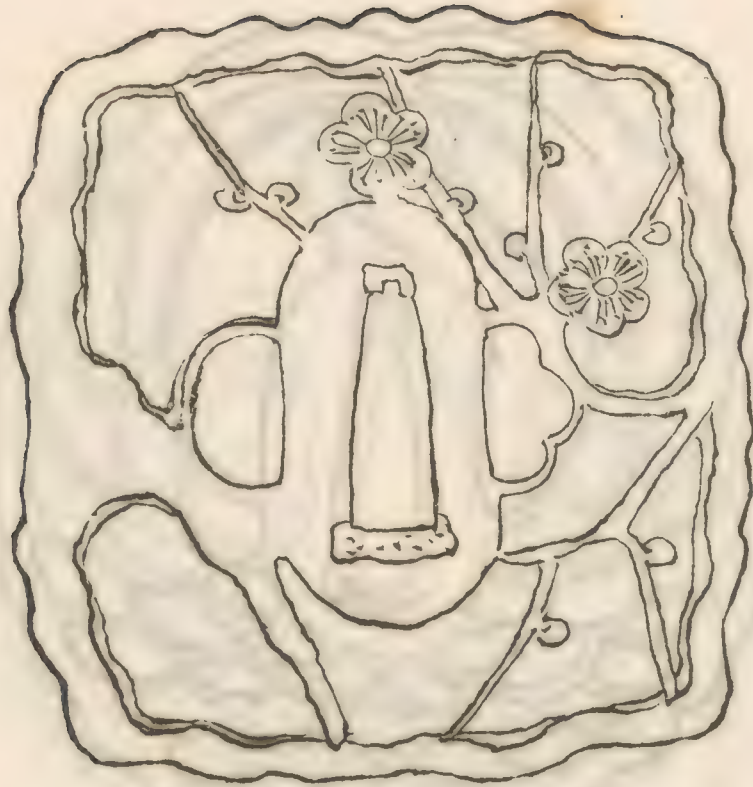
肉置裏上ニ同シ

同作

同作

同作

（此作類ナシ）

同作

カツラ縚キ金

同作

同作

眼真鍮

同作

耳角肉

同作

耳丸肉稍尖

春日二代目作

同作

同作

耳稍角　元金象眼アリ今存スルモノ物体分明ナラス

同作

同作

耳内大ニ尖ル

同作

春日三代目作

櫻霞共ニ透シ菖菱金

ウラ同

同作

菖菱金縄銀銅ヨリ合セ
縄外彫深シ

ウラ同

同作

同作

（初代控モノ）

平田初代作

耳薄キ方　三光内日星透月彫

同作　銅

耳及櫃際共ニ折返シ地ニカキ

门作　真鍮

彫上銀布目象眼　時雨毛ホリ

ウラ门徂蜻蜓卯ク

门作

同作

耳打返　金布目象眼

ウラ同

此処象眼

同作

耳打返　九曜透櫻花金銀布目

ウラ同

门作　烏銅
カヽ透小田原霞輪真鍮

门作　銅
浪彫上松金ケシ込象眼

ウラ门

冂作

花金布目霞彫 霞輪四分一

ウラ花十三

冂作

巴彫紋真鍮据物

ウラ冂

同作

ヤキ手クサラシ

時雨彫霞輪赤銅

ウラ同

同作　銅

象眼赤銅ホリ込

霞輪赤銅

ウラ同

同作

金散紙象眼

ウラ同

同作

九曜銀布目

ウラ同

同作

赤銅

唐艸彫上

同作

金散紙象眼

西垣初代作
眼及髭鼡共ニ金全身及雲銀布目

同作裏
文字彫

同作　真鍮

唐人笠透芦赤銅据物

同作裏

花銅据物其他表ニ同シ

冂作
月皆金
此區赤銅
ニクロメ
銅
赤銅
銅
ニクロメ
四分一
銅
ニクロメ
銅
四分一
ニクロメ
銅
四分一
銅

冂作
松葉金象眼

同作

同作

同作

同作

西垣二代目作

桐唐草共ニ金象眼

同作

西垣勘平作

枯木金布目

同作

八代初代作

猫真鍮据物

焼手ノサラシ強シ

同ウラ

牡丹銀布目象眼

同作
真鍮据物
同ウラ
同作
彫上
目鼻縄共ニ真鍮
ウラ
杭縄共ニ真鍮

同作

真鍮据物

同ウラ

同据物

门作
据物真鍮流金
スリハキ

ウラ

毛ホリ

门作
蛛真鍮据物木目彫深キ方
但シ片切

ウラ木目

门作
据物真鍮
耳ト透但耳金布目

ウラ
门据物

门作
環耳ヌキ下ケ
透際真鍮張金

同作

時雨ホリ

巖ヲ返シ強シ

同作

縄銅ヨリ合セ

八代二代目作

環耳

八代

甚五作

冂作

スキ下ケ菊深彫地銀布目スリハキ

同作

環耳生琴ハリ糸真鍮張金

同ウラ

同作　銅

彫上

八代住

永次作

同裏

彫同

冂作

環耳 スキ下ケ象眼銀張金

八代

甚五作

冂作

銀布目 スリハキ

同作

真鍮据物

ウラ同
据物

甚五作

同作

環耳

ハヤキ手

金張金象眼

此作末詳(二代目カ)
真鍮張金象眼

タガネミキ

八代
紀永

八代三代目作
地ミカキ

三代目
甚吾作

神吉樂壽作

牡丹唐草金布目象眼

ヌク

ヌク

ウラ同

同作

阿弥陀鉋

遠山又七作

冂頼次作
耳赤銅　櫻金布目浪銀張金

三角春信作　赤銅

環耳ミガキ地ナヽコ

水禽芦花彫上但鳥目金

三角春信

行年七十歳

同裏

諏訪數平作

枯木金布目象眼

ウラ同

谷清兵衛作

紋金

ウラ同

附圖終

明治三十五年十月一日印刷
明治三十五年十月五日發行
明治四十三年十月十五日再版印刷
明治四十三年十月二十日再版發行

肥後金工錄奥付

著作權所有

著者　長屋重名

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
發行兼印刷者　合資會社吉川弘文館
代表者　吉川半七

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　新井電新堂

發行所　東京　合資會社吉川弘文館
電話本局六九七
振替東京二四四